
最後ノキセキ <快斗×青子>

モンキーガール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後ノキセキ > 快斗×青子<

【Nコード】

N35030

【作者名】

モンキーガール

【あらすじ】

高校3年になった黒羽快斗。

彼を取り巻く環境は、この1年で大きく変化していた。

新たな道を進むことを決意した快斗は、青子と過ごした日々や、怪盗キッドとして起こした事件を回想していく。

一方、快斗への想いを断ち切った青子には、別の恋人がいて・・・。

大好きな快斗×青子の話です。二人の微妙な距離感など、お楽しみいただけると嬉しいです！

<・い>・追憶（前書き）

はじめまして！モンキーガールですっ！！

とにかくキッド様ラブです。そして、青子と絡んでる快斗も大好物w
少し、長くなると思いますが、頑張って更新していくつもりなので
よろしくお願いします！

<1>：追憶

吹き抜ける生温い風。

耳をつんざく“パン！”という乾いた発砲音。

突然、脇腹に走った衝撃。

スローモーションのように揺らぐネオン。

屋上の床に真っ直ぐ倒れたオレを、ぼんやりと浮かぶ円い月が見下ろしている。

近付いてくる足音。

“落としてはいけない・・・”

意思とは裏腹にこの手から落ちたダイヤを、その男はゆっくりと拾った。

『ここまでだなア、怪盗キッド・・・』

仰向けに寝転んだオレを覗き込むサングラスの男は、ヒゲを湛えた口元を引き上げて不気味に言い放った。

コイツがパンドラを狙う連中の一人であることは明らかだ。

眼球を必死に動かして相手の様子を丹念に観察する。

しかし・・・脇腹が異常に熱く、身体が動かないばかりか、次第に意識が朦朧としてきた。

“オレ、撃たれたのか・・・？おいおい、マジかよ・・・”

こんな日に限って防弾チョッキを装着していなかった。

今日の変装にどうしても邪魔だった為で・・・などと、そんな事を悔いている暇などない。

火薬の臭いが鼻を掠めた次の瞬間

コメカミに押し付けられた硬い感触に体が強張った。

『散々オレらをコケにしゃがって・・・！』

男の目が、ギリリと光った。

『正体を暴いてテメエの大切な誰かさんも消してやるよ。』

その言葉に、オレの全身が震え上がった。

ヤ・・・ヤメロ・・・！！！！

“青子オオーーーーッッッ!!”

ガバッ!!!

勢いよく起き上がった俺の目に飛び込んできた物は、見慣れた鉄の柵。

その向こうには、何処までも続くような青い空。梅雨の合間に訪れた晴天。

運動部のランニングの掛け声が、風に乗って屋上に運ばれてくる。

「ったく・・・まーたこの夢かよ・・・」

髪を掻きむしりながらヨロヨロ立ち上がり、柵に寄りかかって校門を見下ろした。

下校する生徒たちの群れが、昼休みをとくに過ぎて午後の授業をナチュラルにサボってしまった事実を、俺に告げている。

欠伸をしながら、3年の教室に戻ろうと体を動かしたところで、視界の隅に入った人影に思わず足を止めた。

中森青子、だ。

昇降口から出てきた彼女は、小走りで校門に向かっていく。

“ 見なければイイ ”

わかっているのに、目が離せない。

校門の影から、ジーンズにカッチリめのシャツを着た男が姿を現し、青子に向かって手を挙げる。

青子も手を振り返す。

二人は門で落ち合うと親しげに言葉を交わし、寄り添いながら歩道を歩き出した。

その姿が交差点の向こうに消えるのを見届けると、オレは屋上を後にした。

<2>初夏

昇降口を出たところで、制服のポケットにしまつてある携帯が小刻みに震えた。

片手で開くと、ディスプレイには“工藤”とある。

久しぶりだな・・・と思いつつ通話ボタンを押した。

「もしもし！」

『あー黒羽、今ヒマ？』

相変わらずな唐突ぶりである。

「ヒマならなんだよ」

『頼みがあんだよ。わりーけど今からうち来てくんねーか？』

「なんだよ頼みって」

『来てみりゃ分かつから！』

「・・・」

結局、向かった先は駅。

ちょうど、オレも工藤には話したいことがあったし。

電車に乗り込んだオレは、吊り革に掴まりふと上を見上げた。

そこには、どこだかの一足早い花火大会の広告があった。

“もうそんな季節なんだな・・・”

そう、あれから1年が過ぎようとしている。

瞼を閉じると、今も鮮やかに蘇る。

甘く、苦い出来事の数々・・・

幻のように過ぎ去った、高校2年の夏が。

10ヶ月前

あれは、高校2年の夏。

8月に入り、一体どこに隠れていたのかというほどの蝉が、けたたましく鳴き声を轟かせていた。

その日、オレと青子は夏休みだというのに学校へ向かっていた。

ノリで引き受けた文化祭実行委員としての仕事があったからだ。

しまいには、帰りに新しくできたドーナツ屋に連れて行かれることになっていた。

「あーーめんどくせ・・・」

「あのねえ、快斗！自分で引き受けたんだから、ちゃんとやんなさいよね！」

「へーへー。わかってますよーだ・・・。」

集合場所である多目的室のドアを開けると、既に実行委員の面々が集まっていた。

同学年である2年の連中はほとんど知った顔だが、1年や3年に至ってはほとんどがわからない。

「あ！黒羽せんぱいだっ！！」

「まじ！？あつ、ほんとだぁー！」

どこからか、オレを呼ぶ可愛い声がした。

見回すと、1年と思しき茶髪女子の集団がこっちを見ている。

しかし、どの子も知らない……。ので適当に笑って「よっ！」と手を挙げると、きゃあきゃあ騒がれた。

「こんな奴のどこがいいんだか……」

オレを横から見上げながらボソつとつぶやく青子に、オレは勝ち誇った顔で返す。

「なんだよ、オメーあいつらに妬いてんのか！？」

すると、みるみる青子の顔が赤くなっていた。

ぷぷ、面白い奴。

「……なーんで妬かなきゃなんないのよ！このバ快斗！！」

今にも鉄拳が飛んできそうな剣幕だ。

「冗談だろ、ジョーダン！何そんなムキになってんだよ！？」

そんなオレたちのやり取りを、突然3年の男が遮った。

「あれー、中森さんも実行委員だったんだ！こないだはおつかれー！」

馴れ馴れしい様子で青子に話しかけてきた男、そういえば青子と同じ予備校に通っているとか言っていたが・・・

“こないだ”って、なんだ？

「あ、色々ありがとうございます！楽しかったです！恩田さんにも宜しくお伝え下さい・・・」

「ああ、それなら直接言つてよ、あいつ、オレらと同じ予備校に入るらしいから。」

「そうなんですか！じゃあそうです。」

話が見えないオレは、青子の腕を引っ張り、小声で尋ねる。

「おい、なんなんだよさつきから！こないだってなんだよ？」

「あ・・・ええと、予備校の仲間が集まって、海に行ったんだ・・・」

こないだの日曜に・・・」

「ふーん。そういうことな。」

素っ気なく返事を返し、その話は終わった。

<2>初夏（後書き）

感想ありましたら、ぜひお願いします！

&l t ; 3 & g t ; 嫉妬

しかし、なぜだかわからないが、面白くない。

・ 集団とはいえ、3年の知らない男共も一緒に海に行って水着姿を・

み・・・水着だと・・・！？

そこまで考えると、無性に腹が立ってきた。

なんで腹がたつのか、全くわからないが。

ムカムカしてしょうがない。

委員会の最中も、ほとんど上の空で何の話し合いがされたかなどサッパリだった。

「では、こんな感じで進めていくので各クラスでの準備も宜しくお願ひします！お疲れさまでしたー！」

締め言葉でようやく我に返ったオレは、さっさと白紙のままのノートをカバンにしまった。

「ちょっと！快斗ってば全っ然聞いてなかったでしょ！結局青子が全部やらされるんだから・・・」

「いーだろ、別に！男と海行くような暇人なんだからよ。」

思わず出た嫌味に、青子は怒るところか、悪戯に笑みを浮かべた。

いやな予感が過ぎり、それは見事に的中した。

「・・・あれ、快斗、もしかして・・・妬いてるの!？」

「・・・ッ!!んなワケねーだろ！寝言は寝てから言え、アホ子！
」

そう吐き捨ててバッグを肩に引っ掛け、ドアの方へ足を踏み出した。

と、その瞬間、さっきオレを呼んだ一年の女の子が現れた。

「あのーせんぱい、ちょっといいですかー？」

なんだなんだ、よく見ると結構可愛い。

明るい茶色のセミロングの髪をふわふわと巻いて、くりっとりた大きな目でオレを見上げている。

「あの・・・えつとお、よかったら提無津川の花火大会、一緒に行きませんかあ？」

突然の誘いに、「え？オレ？」と返すと、目をキラキラさせながら

頷き、

「あ、ダメならいいんですけど、もし他に行くひとがいなかったらでいいんでー。」

と髪を指にクルクル巻き付けながらオレの返事を待っている。

普段なら間違いなく即答で断る。

別にこの子と行く義理も理由もない。

しかし、脳裏に浮かんでしまった。

・・・オレの知らないヤツと海ではしゃぐ青子の姿・・・

「別にかまわねーけど?。」

気付いたらそう、答えていた。

答えながら、青子をチラッと盗み見た。

その表情が、今にも泣き出しそうだったことにオレは狼狽えたが、横からは

「ほんとですかー!?ちょーーうれしいー!。」

という黄色い声が放たれ、どうにも引けない状況になってしまった。

「じゃあ、あたし先に帰るね。」

伏し目がちにそう告げた青子は足早にドアの向こうへと消えてしまった。

「ちょ、おい！ドーナツ・・・」

追いかけてようとした俺の前に、髪の毛クルクルちゃんが立ちはだかった。

「せんばい、もしかして、今の、彼女ですか？」

上目遣いでオレの顔を覗き込んでくる。

「そんなんじゃないよ。ただの幼馴染みだよ。」

ぶっきらぼうにそう答えると、クルクルちゃんは満面の笑みで「よかったあー」と言いながら携帯を出した。

結局、番号を交換することになったのだが、オレの頭からはさっきの青子の顔が離れなかった。

&l t・'3 & g t・嫉妬（後書き）

<4> 自覚

「なんであいつあんな顔すんだよ。」

結局、ドーナツ屋に行ってみたが青子の姿はなく、そのまま家に帰ってきた。

隠し部屋に籠もり、次に狙うビッグジュエルのイミテーション作成に取り掛かっていたが、青子の顔が浮かんできてイマイチ集中できない。

グラスに入ったカフェオレを飲み干し、2杯目を注ぐため部屋を出た。

階段を降りようとしたところで、インターホンが鳴った。

パタパタとスリッパの音を立てながら、母親が「はい」呼びかけると、馴染める声がドア越しに聞こえた。

「あの・・・青子です・・・」

「あーちよつと待ってね、今開けるから!」

突然の来訪に、ぎくりとした。いや、いつものことだから何も構えることなどないのだが、何故か隠れながら玄関の様子を伺う。

ガチャリとドアが開くと、やはり物寂しげな表情の青子が紙袋を抱えて立っていた。

「いらっしやい青子ちゃん！快斗ならいま二階に・・・」

「違います。今日はこれ、千影さんにお返しにきたんです・・・」

そういつて青子が紙袋を差し出したが、中身がなんなのかわからない。

母親がそれを受け取り中身を確認していると、青子がこらえきれなくなっただけのように涙をひとつこぼした。

“ な、なんだよ、アホ子のやつ何泣いてんだよ ”

理由がわからずに、何故か焦る俺。

「ど、どうしたの！？快斗と喧嘩でもしたの？」

そう言いながら母親が紙袋から出したのは、男物の浴衣だった。

青子はどうとう、ポロポロと涙を流しながら口を開いた。

「快斗・・・他の女の子と花火行くことにしたみたいで・・・だから、おじさんの大事な浴衣、あたしが持っても、もう意味ないから・・・」

「そうなんだ……。でも先に約束してたのは青子ちゃんでしょう？待ってて、今うちのバカ息子呼んでくるから！」

その母親の台詞に思わず逃げの態勢を取ろうとしたが、青子が母親を遮った。

「いいんです！約束っていつても一年も前のことから……。青子が勝手に覚えてただけで、普通忘れてます。だから……」

思い出して……。途端に、自己嫌悪に陥った。

青子が海に行った話でムカムカしていたとはいえ……。一年前、約束していたのは確かな事で、青子が怒るのは間違いない。

去年の夏。数年振りに二人で花火大会に行くことになっていた。

物心ついてからは同性のグループで行く事が多かったのだが、去年は商店街の福引でペア観覧席が当たり、青子を誘ってやったのだ。

しかし、当日になって青子のやつは熱を出して……。結局オレも行かなかった。

そして、約束したんだった。来年は一緒に行こうと……。

だからって……。泣くこたねーだろ……？

「青子ちゃん、本当にそれでいいのかな？それ、本当の気持ち？あ

んなに楽しみにしてたじゃない。ね、素直な自分の気持ち、大事にしてほしいな。あんなバカ息子には、青子ちゃんもつたいたい気もするけどね！」

・・・バカ息子つてのは余計だが・・・
やっと青子の顔に笑みが浮かんだ。

それを見ると、少しホツとした。

いや、まてよ。

“もつたいたい”ってどういうことだよ！？

別に、オレと青子は・・・

「別に、青子と快斗とはそんなじゃない・・・！
つて・・・いつも、そんなふうに着地張っちゃうんです。でも、ほんと、素直になりたいんです・・・。
こんなことおかあさんの前で言うなんて変ですね。」

青子は結局、親父のだという浴衣を置いて、帰っていった。

素直になりたい

その意味を、わからないふりして逃げている自分に、本当は気付い

ていた。

でも、ずっと幼馴染みとして過ごしてきた相手に、そういう気持ちを抱くことがどうしても素直に受け入れられなかった。

オレは・・・そうか。

だから、青子があいつらと海に行った話にあんなにむしゃくしゃしたのか。

あんなのは、集団で遊びに行っただけだ。

今日知り合った女の子と花火大会の約束するほうが、よほど傷ついたりただろう。

青子がオレと同じ気持ちだったなら。

ようやくオレは足を動かした。

階段を降りきると、紙袋を持った母親がリビングのドアを開けて立っていた。

オレは無言で紙袋に手を伸ばした。

母親が薄笑いを浮かべているのを見ないようにそれをひったくると、勢いよくドアの向こうへと飛び出した。

<4> 自覚（後書き）

こんにちは。 モンキーガールです。

ここまで読んでくださって、本当にありがとうございます（*^o^*）

時間があまり取れないのでノロノロ更新になってしまいかもしれませんが、

最後まで必ず書き上げたいと思っています。

おつき合いいただけたらうれしいです。

また、ご感想もいただけたら、どのようなものでも大変喜びます!!
ぜひお声をお聞かせください!!

宜しくお願い致します！

<5> 選択

まずは携帯を取り出し、今日登録したばかりの番号を表示させると通話ボタンを押した。

相手は、ワンコールで出た。

『もしもし？せんぱい？』

「あー、そう、オレだけど・・・」

その言葉の後、ほんの一瞬のうちに考える。

これは、このまま電話で済みますのか、ちゃんと会って話すべきか。

自分のダメっぷりを考えれば、前者でいいはずがない、と結論づけたオレはすかさず言葉を繋げた。

「あのさ、ちょっと今から会って話せねえ？」

至って真剣に言っただはすなのだが、電話の向こうからはクスクスと笑い声が漏れてきた。

「おま、何笑ってんだよ？」

『だってせんぱい、早過ぎでしょ！まさか当日にくるとはなあー。せめて明日かなとは思っただけど！はははっ！..!』

わけがわからず、オレはどう返せばいいか困惑していた。

『花火、一緒に行けないって話ですよね……？さっきの彼女さん行くんじゃないですかあ？』

驚いた。なんでわかるんだ！？しかし……

「いや、別にあいつは彼女じゃねーんだけど……」

事実を述べようとしただけだったが、そんなオレの言葉を遮るように、クルクルちゃんが言い放った。

『せんぱいっ！！素直になったほうがいいですよ！』

さっきだって、見ててバレバレですよ。めっちゃめっちゃ彼女さんのこと気にしてたじゃん……

せんぱいイケメンなのに、なんでそっち系そんなに疎いんですか？』

彼女はなおも可笑しそうに笑う。

しかし、オレは何も言い返せない。

素直に……

「ホント、ごめんな……オレ、超かっこわりい……」

『えへへ、勢いでも一緒に行けたらラッキーって思ったけど、遅かれ早かれ断られるのはわかってましたよ！
違うイケメンくんに行くから、そんな気にしないでくださいよお！』

恋愛に関しては、この一年生の女子のほうがよっぽど上手だった。

オレの自惚れだったらいいが、もしかしたら、凄く傷つけたかもしれない。

なのに、それを感じさせないように明るく振舞っていたのだとしたら、オレは彼女に謝っても謝りきれないと思った。

「んじゃ・・・ホント、ごめんな？」

『大丈夫ですよ！あたし他にも誘われてるし…せんぱいは彼女さんで行ってきてくださいね…』

“彼女さん”——もう、そこを否定する気は起きなくなってた。

そして、心からの礼をいった。

「・・・ありがとな。」

人から教えられてばかりだ…

自分に正直になる。

俺たちに足りなかったのはそれだけ。

&l t・5 & g t・選択（後書き）

ちよつと恋愛に疎い快斗くんです。

女好きみたいなどこある癖に、恋愛経験はなかったんですもんね。
そこがまた、いいんですがw

さて、気持ちに決着がついた快斗。

青子に対してどんな行動に出るのでしょうか？？

次回も宜しく願います（´・`・´）

<6>変化

ケータイを後ろポケットに捻じ込み、足を早めて向かった先は、もちろんさつき我が家の玄関先に水玉模様を残していったあいつの所だ。

インターホンを鳴らすと、スピーカー越しに青子の声が聞こえてきた。

「オレ・・・だけど。」

そう告げると、しばしの沈黙があった。

「・・・いま行く」

ためらいがちな返事のあと、ガチャリと音をたてて、ドアの向こうから青子が姿を現した。

まず、青子の視線は俺の持っている紙袋に注がれた。

「快斗・・・それ・・・」

「ああ、親父の浴衣だろ？当日オレに着せようと目論んで、うちの母親から受け取ってたんだろ？」

そんなオレの言葉に、青子は顔を曇らせた。

「・・・でも、もう必要ないからさつき千影さんに返したの。だって、そうでしょ？」

またもや瞳を潤ませる青子は、思わず抱きしめたくなくなるほど可愛くみえた。

こんな風に感じたのは、正直、初めてだ。

自分の心を素直に開け放つと、こんなにも世界の見え方が違うのかと感動すら覚える。

オレは今にも肩を抱いてしまいそうな手を必死に軌道修正すると、青子の頭に軽くポンと乗せた。

「わりい。今日はすっかりしてた。花火大会・・・去年オメーと約束してたの思い出して、あの後輩には断ったぜ。」

きつと一気に明るい顔になるだろう・・・と思っていた。

しかし、オレに向けられた青子の視線は妙に冷たく、オレの背中には嫌な汗が流れた。

「な、なんだよ、嬉しくねえのかよ？」

「そんなの、あの子可哀想じゃない・・・快斗、ヒドイ・・・」

そうだ、青子はこっぴどい奴だ。

自分はさて置き、まずは人の事を心配して……。

そついうところにも、きつと知らず知らず惹かれていったんだ。

オレが最悪なことしかしたのは、十分に自覚している。

素直になれず意地を張り、わざと鈍感になっていた。

そして二人を傷つけた。

だからこそ、自分に嘘をつくようなことはもうしたくない。

自分の抱いた想いを素直に認めて受け入れられたら、きつと通じ会える。

ここが勝負だ……そう思うより先に、言葉が出ていた。

「あの子には、ちゃんと詫び入れた。本当に悪いことしたと思ってる。」

けどな、オレがどうしたいのか……それだけ考えた。

約束あったとかないとかこの際置いといてよ。

オレが……こうしてえと思った。」

無意識にオレは笑顔になっていた。

今度こそ笑ってくれるかと思ったのに、青子は顔をくしゃくしゃに

して涙を零した。

おかしいな、また泣かせてしまった。

しかし、泣きながら笑おうとしているのはわかったので、玄関先である事も忘れて肩を引き寄せた。

なびいた髪からふわりと甘い香りが漂う。

無意識にそれを胸の奥まで吸い込むと、くらりと眩暈を起こしそうになる。

ポンポン…と背中を叩いてやるのが、精一杯だった。

オレの胸に顔を埋めた青子がどんな顔をしてるのかはわからなかったが、嫌がって離れなかったことで充分だった。

いい雰囲気だけど・・・せっかくだから、“その時”は、もう少し先にするな・・・と、心の中で呟いた。

<6>変化（後書き）

こんにちはっ！

ここまでご覧下さりありがとうございます！

感想やお気に入り登録、ありがとうございます*。（*、D、）。
*。

もう少し、この二人の回想シーンが続きます。

恋愛に関しては奥手なこの二人を、もう少しばらくお楽しみいただけ
たら幸いですww

感想がありましたら、ぜひ宜しく願います。
とても励みになります。

お返事は必ずつけさせていただきます（、、）

今後も「最後ノキセキ」を宜しくお願いします。

&l t ; 7 & g t ; 夜店

歩道を埋め尽くすほどの人の波。

どこからか聞こえてくる祭り囃子。

そして、向日葵をあしらった藍色の浴衣を身に纏い、髪をアップに
まとめて色っぽいうなじをちらつかせている、想い人。

その隣を、親父のストライプの浴衣で歩くオレ。

今夜は、待ち焦がれた花火大会だ。

会場となる河原には、すごい数の屋台が並んでいる。

オレと青子はちょうどその入り口に入るところだった。

漂ってくる、美味しそうな匂い・・・

「チョコバナナくいてーな！」

「えーっ！まずはお面よ！お面！」

「はぁ？お面てなんなんだよ・・・ガキじゃあるめーし！」

「いいじゃない！お祭りって感じで！お面買わないと雰囲気出ないよ！」

青子に腕を掴まれ、半ば無理矢理お面屋へと連れていかれた。

「どれにしようかなあー！」

楽しそうに飾られたお面を眺める青子。

・・・オレはその横顔から目が離せない。

「よし！あたしはドッキンちゃんにする！」

ハイハイ、好きなを選べよ・・・ってオイ！

「あたしは”ってなんだよ！？」

「えっ何が？快斗はどれにするの？」

何故かオレも道連れにされようとしていた。

「・・・オレ、なくても我慢できるからいいや・・・」

「だーめ！快斗も選んでよ！一緒につけるんだからー！」

はつきりいつて、“んなダセーもんつけられっか！”なんて思ったが、あまりに楽しそうにしている青子を見ていたらそんなことも言えず、結局選ぶハメになった。

「じゃあ・・・これ・・・」

と、オレが選んだのはバカッ殿というキャラのお面。

どうせなら、インパクト重視である。

「ぶっ！！なにそれえー！！！快斗、おつかしー！！」

ケタケタとお腹を抱えて笑う青子を見て口を尖らせたオレは、ウケた事に内心ガッツポーズ。

「ふたつでいくら？」

「1600円ね。」

「うわ、たけーな・・・」

おっさんに札を差し出したオレに気付いた青子が慌てて財布を出してきたが、いいからいいからと遮った。

こんなんでこんなに喜ぶなら安いもんだ。

「青子を買おうって言い出したのに・・・なんか悪いよ、こっこの・・・」

「いちいちこまけーよ！いーんだよ気にしねーで。」

お面を後頭部あたりにセットしながら答える。

うん。なかなか雰囲気が出ていいかもしれない。

「でも・・・」

「わかった。じゃあチョコバナナおごつて。」

「・・・うん！わかった！チョコバナナ探そ！」

急に表情を明るくした青子に、オレも口元が上がる。

コイツのこういう可愛いところは、いままでだって沢山あった。

ただ、その感情がなんなのかがわからなかっただけ。

気付いてしまえば、至極単純だった。

「おっ！あつたぞ！チョコバナナ・・・」

振り返って声をかけたが、連れ立って歩いていたはずのドッキンちゃんは見当たらない。

とにかく分刻みで人が増えていくから、簡単に人混みに紛れてしまったらしい。

暫くすると、チョコバナナの看板に吸い寄せられるように青子が現れた。

「快斗！もっつ！急にいなくなないでよ！」

「それはオメーだろ？しつかりついて来いよな！」

言い合いながらも約束通り、チョコバナナ2本を買った青子から、一本がオレに差し出された。

「おおー！やっぱこれだよな！」

バナナにチョコをかけただけのそれをかじりながら再び歩き始めたが、相変わらず人が凄い。

左を歩く青子がちゃんというのか、横目で確かめた。

そこで、ふと、名案を思い付く。

「おい青子、バナナ左手で持てよ」

「えっ・・・うん？」

怪訝な顔をしながらもオレのいう通りにバナナを持ち替えた青子は、右手が空いたわけで。

スツと、その手を取った。

思ったよりずっと細くて柔らかい感触に、トクンと心臓が跳ねる。

記憶にある青子の手はいつも湿っててムチムチした感触で、大きさもオレとそんな変わらなかったはずだ。

それが今じゃ、力を入れたら簡単に壊れそうなほどに華奢で…
やたらスベスベしている。

どれくらいの力加減にすればいいのか戸惑ったが、取り敢えず指先のあたりだけ軽く握るように繋いでみた。

振りほどかれたらどうしようとか思わなくもなかったが、はぐれなためというオレなりの立派な理由があった。

しかし、結局そんな主張をする場面は訪れなかった。

青子のヤツは恥ずかしそうに笑うだけで、何のツツコミもなかったからだ…。

逆に照れるだろうか!!

オレたちは、遠慮がちにその手を繋げたまま出店で食べ物を買
込み、花火の観覧エリアへと向かった。

&l t ; 7 & g t ; 夜店（後書き）

こんにちはっ！！

えーと。手を繋いでいただきましたw

浴衣姿で花火大会、いいですねえ！。

書いていて、二人が羨ましいです♪（、ε、
）

そんなわけで、甘酸っぱい二人の話でした。
お楽しみいただけましたでしょうか。

引き続き、感想も宜しくお願いします。
泣いて喜びます（、、、）

<8>・花火

打ち上げ場所を取り囲むように、辺り一体はレジャーシートで埋め尽くされている。

もちろん、オレのシートも、最高の位置を陣取っていた。それも、数日前からだ。

目的を果たすためには、入念なりサーチと準備をしなければ気が済まない、キッドの性がこんなところでも生かされていた。

「快斗、場所取ってたの？」

「つたりめーだろ！前もって取らねえと、近くでなんか観れねーかな。」

青子の目が喜びに満ちているのが見て取れて、それだけで満足だった。

どちらからともなく手を解き、シートに腰を掛けて屋台の味を楽しみながら、陽が落ちるのを待った。

群青色に染まっていた空が、すっかり深い闇に飲み込まれたその時、辺りを照らしていた照明の明かりが全て落とされた。

大会本部から、花火開始のアナウンスが流れ、しばらくすると、軽快な破裂音が会場に轟いた。

「わあ!」「きた!」と、歓声が湧き上がったと同時に、真つ暗闇だった辺り一面に、眩いほどの光が一齐に放たれた。

空を見上げる人達の笑顔が一带に浮かび上がる。

もちろん、オレの隣にいるヤツの顔も、くつきりと目に入った。

そんなオレの視線に気付いたのか、青子もオレを見上げてにっこりと笑った。

「キレーだねえ、快斗!」

その笑顔を視界に捉えた瞬間、花火の音に負けなくらい胸がドクンと音をたて、息が詰まりそうになる。

顔が急に熱くなってきたのがわかり、これが昼間なら耳まで赤いところを見られてしまうだろう。

「だな。」と一言返すと火照った顔を隠すようにまた空を見上げた。

オレは一体どうしてしまったんだ。

こんなのは得意のポーカーフェイスでいつも通りにしていればいいはずなのに、なんだか体の自由が聞かなくなったかのようだ。

意思とは無関係に、呼吸や脈拍が乱される。

それが、凄く、心地イイ。

数千発もの花火たちは、綿密な計算のもと打ち上げられているのだろつ、夜空をキャンバスにした芸術作品のように、美しく咲き誇った。

特に、フィナーレを飾った“空中ナイアガラ”には目を見張った。

何発もの玉が一斉に打ち上げられ、同時に空で咲き乱れた。

そしてその全てが銀色の枝垂れ柳となって東京の夜空を埋め尽くした。

キラキラと瞬きながら川面に消えて行く光の粒を、誰もが最後まで見送った。

しかしこの日は結局・・・

青子に自分の気持ちを伝えることができなかった。

夢中で花火に見入っていてタイミングを逃したから……などと情けない言い訳を思い浮かべながら、青子が無事に家まで送り届けたのだった。

&l t ; 8 & g t ; 花火（後書き）

こんにちは！モンキーガールです（ 、 、 ）ノ

ここまで読んでくださりありがとうございます。

快斗くん・・・大事なと言えなかったみたいです
ねw
こんな二人がかわいくてしょうがないのです。

今後も宜しくお願いします。

&l t ; 9 & g t ; 相思

花火大会から1週間後。

青子に誘われて、遊園地に行った。

そのとき、何度も想いを伝えるタイミングを伺ったが、もう一人のオレが結局それを許さなかった。

もう一人のオレ・・・

・・・怪盗キッド。

それを追う警部は青子の父親。

そんな状況で、オレと青子が恋人と呼ばれる関係になっていい筈がなかった。

そして、決意した。

必ず全てのカタをつけ、怪盗キッドを辞めたとき、真っ先に青子へ想いを伝えるべくことを。

そのために、残りの夏休みは欧米諸国にまで活動範囲を広げ、帰国したのは始業式の前日だったが、パンドラに巡り合うことはなかった。

た。

しかし、母数を減らしただけでも充分意味があった。

2学期。

教室に入ると、青子は既に着席していた。

ポン！

と頭を叩き、背を向けたまま席を通り過ぎた。

「えっ・・・快斗・・・！！」

背後からずっと聞きたかった声がした。

振り向くと、頬を紅潮させた青子がオレをまっすぐ見ている。

バカみてーに嬉しそうな顔で。

「おー青子、そんつなにオレがいなくて寂しかったのか！？」

屈んで顔を覗き込むと、途端に青子の眉が釣り上がった。

「別に・・・寂しくなんかなかったわよ！！」

さらに顔を赤らめて、膨れっ面になる。

オレは思わず笑みを零すと、青子に耳打ちした。

「土産あるから放課後うち来いよ。」

それだけ告げると、返事も聞かずに自分の席に着いた。

いま、顔を見られたら、ポーカーフェイスを保てる自信が正直なかった。

「泣く子も黙る大怪盗が形なしね・・・」

突如、後ろから聞こえてきた呟きに仰け反った。

「うわ・・・なんだよっ・・・!」

小泉紅子だ。

「やめときなさい。彼女とあなたは光と影。交わることはないんだから・・・」

何でも見透かすかのような目でオレを見やる。

「なんのと言ってんだかさっぱりだな?」

「ふふ。ま、あなたのことから、わかっているんでしょうけど。ところで次のヤマ、気をつけた方がよくなってよ。信じるかどうかは、あなた次第だけど・・・。」

それだけ言つと、さつさと自分の席に戻って行つた。

相変わらず不気味なことを言いやがる。

その忠告が、正しかったことを知るのは、もう少し先のことだ。

放課後。

待ち合わせたわけでもないが、自然と青子とオレは並んで下校した。鍵を開けて家に入ると、青子をリビングに通し、ダイニングテーブルに麦茶を置いてやる。

以前はオレの部屋でくつろいでいくことが多かったのだが、最近はずっとこうだ。

部屋に二人きりだと理性がどうの・・・とかそういう理由ではない。単に、隠し部屋の存在が知られる恐れをゼロにしておきたいだけだった。

部屋で着替えを済ませ土産を持って下りていくと、青子はテーブルの上にあつた雑誌をパラパラ眺めていた。

「そんじゃ、まず、これはうちの母親から。」

オレが土産の包みをテーブルに置くと、青子が顔を上げた。

「えっ！お母さんからも！？うれしい…！」

目を輝かせながら、包みに手を伸ばした。

それからオレは、緊張を隠しながらもう一つの包みを差し出す。

「んで、コレはオレから…」

それを満面の笑みで受け取る青子に、さらに緊張が増す。しかも、

「いま開けていい？」

などと聞かれたら頷くしかなく、開けたときの反応を目の前で見る
ことになると思うと、逃げ出したい気分にならなつた。

しかし、返つてきた反応は期待以上だつた。

「・・・すごーい！！すごいキレイ！！すごい可愛い！！えっ
？ほんとに？ほんとにこんなもらつてイイの！？これ快斗が選ん
だの！？すごい嬉しいよ！嬉しいすぎる！高かつたんじゃないの？
ていうか、この石って・・・」

それは、サファイアのネックレス。

雫形にカットされた小さなサファイアが8つ、四葉のクローバーを
型どつた台座に並んでいる。

値は張ったが、パリで見つけた時、これ以外のプレゼントは無いと思った。

「オメーの誕生石。ま、ちょっと早い誕生日プレゼントってことでほんとは当日に渡すつもりだったんだけどよ、なんか待ちきれなかったっていうか……。まあ、当日はケーキでも買って祝ってやるよ。」

オレのその言葉に、青子は紅い顔をしながら幸せそうに笑った。

そんな姿を見て、やっと心底ホッとした。

早速そのネックレスをつけた青子は、次に母親からの土産を開けた。

「わあー！！これ、雑誌で見たことあるやつだー！！日本では手に入らないって……。凄い嬉しいっ！！」

中身は香水だった。

「なんだよオメー、香水のことなんか知ってんのか！？」

「そりゃ知ってるわよ！これでも女子高生なんだからっ！買ったことないけど……。紅子ちゃんはいくいい匂いするよね？」

「さあ？知んねーけど、オメーそなんん付けるのかよ？」

「じゃあ、今日から付けちゃお！」

そついうとキャップを外し、手首にヒト吹きさせ、反対の手首に擦

り付けると、今度は耳の後ろにくっ付けた。

どうやら使い方は知っているらしい。

「わー！いい香り！！ね！」

「・・・まあ、悪くねーな。てかオメー、学校にはしてくんなよ。休みにオレと会う時ならいいけどよ・・・。」

無意識にそんなことを口走ってしまい自分でもびつくりしたが、青子は当たり前のように頷いて香水瓶を箱に仕舞った。

それから麦茶を一口飲んだかと思うと、突然真剣な眼差しでオレを見つめてきた。

「あのさ、快斗・・・」

「ん？」

「あ、青子ね、実は・・・」

その雰囲気、俺の中で警笛が鳴り始めた。

これは・・・よもやの・・・！？

「実は青子、かつ・・・快斗のことがね・・・その、すつ・・・」

「ちょっとおゝ待ってくれ！！！」

叫びながらガシッと青子の腕を掴んだ。

イキナリのことに、青子は目を丸くして固まっていた。

「いや・・・その・・・」

オレも予想外のことに動揺を隠せないでいる。

しかも、精一杯の言葉を遮られた青子は一気に顔を曇らせたので、オレはさらに焦った。

「違うんだよ、青子。その、オレから！オレから言わせて欲しいんだよ・・・」

その言葉に、えっ？と驚いた顔に変わった青子を見つめながら、更に続けた。

「で、でも今じゃねーんだよ。その、準備があるっていうか・・・とにかく、その時になったら、必ずオレから言う。それまで、待っててくんねーか？」

青子は驚いたような、悲しんでるような、それでいて喜んでいるような・・・複雑な表情を浮かべたのち、静かに頷いてくれた。

「う・・・うん。うん、わかった。待ってるね・・・」

そして、優しく笑った。

必ず、必ず全て終わらせる。

想いを遂げる日を想い描いて。

<10>悪夢

「おのれえー！キッドオオオオー！！！！！！！！」

美人秘書が煙幕と共に怪盗キッドへと姿を変えたその瞬間、中森警部の声が店内に轟いた。

そこは、東都デパート11階の特設催事スペース。

時間は予告通り、22時ちょうど。

この手には既に、100カラットを超えるダイヤモンドが握られていた。

警察官や機動隊が動き出すよりも早く、オレは袖から閃光弾を床に落とす…。

ピカーーーーーッ！！！！

一瞬にして辺り一面が眩い光に包まれた。

誰もが顔を覆ったが、さすがに何度となくオレと渡り歩いてきた警備陣だ。

即座にサングラスを装着し、態勢の立て直しに入った。

「お見事です、中森警部。でも、暗闇にそんなものは何の役にも立ちませんよ？」

「なんだと!？」

笑みさえ含んだその台詞に警部があからさまに動揺を見せたその瞬間。

フツと全館の照明が落とされた。

もちろん、オレの手で。

素早く数発のトランプ銃を窓ガラスに打ち込み、派手に蹴破るとハンググライダーを広げ、飛び立った。

と、同時に屋上にダミーロボットを投げ放つ。

すると警察官の一人が割れた窓から、まんまと屋上の方を見上げ、声を上げた。

『飛び去ったのはダミーです!! キッドは屋上に登った模様です!!』

『よし! A班は屋上へ!! B班は周辺にて待機!』

イヤホンから聞こえてきた間抜けな無線に声を上げて笑いながら、

高層ビルが並ぶ一帯へと進路を取った。

ビルの間を吹き荒れる風を縦横無尽に乗りこなし、徐々に高度を上げ、とある建物の屋上に降り立つと、空を見上げる。

そこは、高層ビルの合間からでも、正面に月を拝める絶好の場所であり、今日の風向と風速から割り出してあった場所だ。

早速、ダイヤを月に掲げようと、胸ポケットから取り出した、その瞬間。

突然、脇腹に衝撃が走った。

と、同時に大気を震わす“パン！”という乾いた発砲音が耳に届く。

スローモーションのように揺らぐネオンと、吹き抜ける生温い風。

屋上の床に真っ直ぐ倒れたオレを、ぼんやりと浮かぶ円い月が見下ろしている。

転倒の衝撃で外れたシルクハットが静かに床を転がっていく。

徐々に、近付いてくる足音。

“落としてはいけない……”

意思とは裏腹にこの手から落ちたダイヤを、その男はゆっくりと拾った。

「ここまでだなア、怪盗キッド……」

仰向けに寝転んだオレを覗き込むサングラスの男は、ヒゲを湛えた口元を引き上げて不気味に言い放った。

コイツがパンドラを狙う連中の一人であることは明らかだ。

眼球を必死に動かして相手の様子を丹念に観察する。

しかし……脇腹が異常に熱く、身体が動かないばかりか、次第に意識が朦朧としてきた。

“オレ、撃たれたのか……？おいおい、マジかよ……”

こんな日に限って防弾チョッキを装着していなかった。

美人秘書のウエストがあまりに細く、変装にどうしても邪魔だった
為で・・・などと、そんな事を悔いている暇などない。

火薬の臭いが鼻を掠めた次の瞬間

コメカミに押し付けられた硬い感触に体が強張った。

“あちゃー・・・まずいだろ、これは・・・”

「散々オレらをコケにしゃがって・・・！」

男の目が、ギラリと光った。

「正体を暴いてテメエの大切な誰かさんも消してやるよ。」

その言葉に、オレの全身が震え上がった。

大切な・・・誰か・・・

母親と、そして青子の姿が、恐ろしいほど鮮明に浮かんだ。

“ ヤ．．． ヤメロ．．． ！！！ ”

声にならない声。

“ 青子オオオーーーーッ！！ ”

<10>悪夢（後書き）

こんにちは！

モンキーガールです！

最近、めっきり寒くなってきました・・・

みなさま、体調にはお気をつけくださいね！

えーと。もうすぐ皆が大好きな彼とか彼もでてきます♪（、、（

感想ありましたら是非お願いします

<11> 危機

ドゴッ
！！！！

死をも覚悟したその刹那、衝撃音と共に視界を塞いでいた男の姿が消えた。

「ぐあッッ！！！」

男の呻くような声と共にドサッという振動が床を伝い、奴が何らかの手段で吹き飛ばされたことを悟った。

失いかけていた意識を無理矢理引き戻し、瞼をこじ開け、そのぼやけた視界に映し出されたものは……

「め……たんで……」

小さい子供のシルエット。

顔は見えなくともわかった。

こんな所に突然現れ、得体の知れない男を吹き飛ばし、さらにその銃を拾い上げて相手に突きつけることのできる子供など、アイツしかない。

江戸川コナン

男はビルのフェンスを飛び越えて姿を消した。

それを確認したオレの意識は、再び朦朧とし始める。

「おい！キッド！！てめえしっかりしろ！！こんなところでくたばってんじゃねえよ！・・・救急車、呼ぶからな・・・ッ！？」

オレに駆け寄りながら叫ぶ小さな名探偵の声は、追い続けた獲物をようやく確保したというのに悔しそうにさえ聞こえた。

それから本当に救急の要請をしゃがった。

マズイ展開になったとわかっているが、体が動かない。

コナンは携帯を閉じるなり、オレの前髪をかき上げ、そしてモノクルに手を掛けた。

「搬送の邪魔になる。・・・不本意だが、外すぞ・・・」

不本意なのかよ？と、思わず笑いがこみ上げてくる。

しかし、言いたいことはわかる。

得体の知れないどこその野郎にやられたオレを捕まえたところで、コイツの欲などちつとも満たされないのだろう。

工藤新一・・・

コイツは、そういう奴だ。

小さな手がゆっくりと視界を侵食していく。

カチャ・・・と小さな音をたて、それは外された。

霞みながらも、はつきりと。

その眼鏡の向こうにある瞳と視線がぶつかったのがわかった。

そう、それは、予想通りの反応だった。

目を見開いたまま、表情を硬直させている。

そりゃ、そーだ。

自分と瓜二つの人間が、目の前にいるのだから。

「オメー……もしかして、前に蘭が渋谷ですれ違ったって……！」

と、その時。

聞きなれた声が屋上に響いた。

「ぼっちゃん……！ぼっちゃん……！……！」

次の瞬間、オレは意識を手放した。

&l t ; 1 2 & g t ; 生還

青子がオレを呼ぶ声がする

いつもみたいに

ちよつと不機嫌な感じで

何回でも聞いていたくて

また意地悪をする

するとまた、青子がオレの名前を呼ぶ

フツと目が覚めた。

クリーム色をした無機質な天井が見える。

ここが病院であると気付くのにそう時間はかからなかった。

「快斗！？快斗！！」

それは母親の声だった。

視線を向けると、涙を浮かべてやがる。

「泣いてんじゃねーよ・・・」

ひどく掠れた声が出た。

どうやらオレは2日間眠り続け、
奇跡的にというわけでもないがこうして意識を取り戻すに至ったようだ。

母親の話によると、あの屋上で意識を失った直後に寺井ちゃんが現れ、キッドに関する証拠品を全て持ち去ったのだという。

それをあの眼鏡のボウズが指示したのだと聞いて、耳を疑った。

救急隊が駆けつける前に白い衣装を全て取り上げられたオレは完全に“黒羽快斗”となり、ボウズの作り話によって“キッド見物に来て流れ弾に当たった不運な高校生”という筋書きまで与えられていた。

午後、ドアの開く音で目を開くと、そこには泣き腫らした顔の青子が佇んでいた。

心配しすぎだろ・・・と、思わず笑いかけると、たちまち泣き出してしまった。

黙って手を差し伸べると、ゆっくり近づいてきて、恐る恐る手を出した。

少し身体を起こしてその手を掴み、ベッド脇に座るようジェスチャーした。

「まあこの通りオレは平気だから。」

手を握り、努めて明るく言ってみたが、青子はなかなか泣き止まなかった。

しばらくすると落ち着いたのか、身体の状態について聞かれた。

オレは安心させてやりたくて、大した事ないと繰り返した。

その日は沈んだ顔のまま帰っていった。

翌日、土曜だったので青子は午前中からやってきた。

前の日に比べると表情も落ち着いていた。

オレが意識のない間に学校で起きたことを話したり、入院中の暇つぶしグッズを渡されたりした。

すると突然、青子が真面目な顔になった。

「ね、快斗……。青子、待ってるから。ちゃんと待ってるから、勝手に……。離れていかないでね……。」

オレが死ぬかと思っただけ不安に飲み込まれたからなんだろうか。

消え入りそうな声でそんなことを口にした。

好きだ……

今にもこの想いを打ち明けたくなる。

しかし、まだそれはできない。

「んな顔してんじゃねーよ。だいたいオメーは心配しすぎなんだよ。オレがこれくらいでくたばるかっつーの！だから、アホ子なんだよっ！……」

わざと悪態をついてみせた。

「……な、なによっ……。ひ、ひとが真剣に言ってるのに」

むくれた青子の手をすつと取り、昨日とは少し違うやり方で顔の前で指と指を絡め合いその手を慈しむように握りしめた。

途端に、青子の顔が茹で蛸のように真っ赤なる。

目を細めてその様子を見ていたオレは

「青子のくせに、赤くなってるな」

と言。

途端に、青子の眉が釣り上がった。

ころころ変わる表情に、口元がほころぶ。

なんだかんだいってやっぱり、オレはこの瞬間が、好きなんだな。

「・・・快斗お～～～！！！」

「いててててて！！！！オレ怪我人！！怪我人！！」

機嫌を損ねた愛しの姫君は、オレの指を折らんばかりの馬鹿力で握り返してくる。

「ちょ、おま！マジつええ！てか、あはっ！痛え！笑うと腹、痛え！！！」

「ざまーみろーだーっ！バ快斗！！！！」

この時の二人の笑い声は

オレの耳に

いつまでも残って

離れない。

このあとオレは小さな探偵の来訪により

直視すべき現実から目を逸らしていたのだと、

思い知ることとなる。

<13> 忠告

日も暮れ始め、青子は翌日も来るからといって帰っていった。

一人になり物思いにふけっていると、気になるのはあいつの行動だった。

日本警察の救世主とまで言われる名探偵が、世界を又にかけの大泥棒を逃がすなど、いくら真っ向勝負を望んでいるとしても理解し難い。

身体が動くようになったら直々に話をしに行くか・・・と思っていたが、すぐにその必要はなくなった。

「黒羽くん！そっくりな弟さん来たよーっ！」

・
看護士に連れられて姿を現したのは紛れもなく、小さな探偵くん・

部屋に入るなり、気軽に声を掛けてきやがった。

「よっ！元気そうじゃねーか？」

「ほんと、あなたに瓜二つ・・・興味深いわね・・・」

と、なぜか小さな科学者さんも一緒だ。

“灰原哀”とかいったっけ。

オレは少し体を起こして切り出した。

「今回の件では素直に礼をいうぜ。…しかし、オメーどういうつもりだよ。いーのか？傷が治れば、また家業に復帰するかもしれないぜ？」

「そりゃ大歓迎。オレはただ単に、どこぞの外部因子に羽をもがれたコソ泥を捕まえることなんざ、面白くねーと思ったただけだ。」

その嘘っぽい言葉に、はん、と鼻で笑うと、奴も不適な笑みを浮かべる。

そんな理由である筈がない。

しかし、他に理由があつたとしても、奴がそれをオレに隠す必要があるのであれば、それを問い詰めるのも野暮だと思った。

「てか、そんなこと話に来たんじゃねーんだよ。椅子、借りるぞ。」

二人は丸いすにちょこんと腰を掛けた。

こうして見れば、かわいい小学生にしか見えないなあ・・・
と思うが、あくまでも中身は高校生であり、優しく接してあげようなどとは思わない。

「なんだよ？オレは他に話すことなんか何もねーぜ。それにこちらのお嬢さんは何のご用事で？」

「あら、来ちゃ悪い？警察を手玉に取って世界中の財宝を荒らし回る怪盗さんの素顔が高校生で、しかも好敵手である工藤新一と瓜二つだと聞いたたら、見てみたくなるじゃない？私の事は気にしないで話を続けて。」

そのマイペースぶりに名探偵も苦笑いしながら、口を開いた。

「そんじゃ、本題に入るか。まあ、余計なお節介って言われりやそれまでなんだが・・・まず、オメーのことを多少調べさせてもらった。」

「ははっ。さすが探偵サンなだけはあるな。」

「中森警部の娘、中森青子。オメーの女だろ？」

当たらずとも遠からず・・・

思わずオレは苦笑いを漏らす。

探偵クンは眈々と話を続けた。

「オメーを狙うあの連中が何者なのか知んねーが、銃口をこめかみに突きつけられたあん時、ヤツが吐いたセリフを忘れたわけじゃねーよな？」

正体を暴いてテメエの大切な誰かさんも消してやるよ

忘れるわけがない。

「単刀直入に言う。彼女を守りてーなら、完全に距離を置くんだな。」

突然やってきてオレらの間柄に口を出されて、さすがにオレも少々頭にきた。

「そりゃあご丁寧にどうも。言いてーことはそれだけか？」

冷たくあしらうオレの言葉にも、名探偵は眉をぴくりとも動かさない。

「感情的な性質は時に論理的な思考を妨げる……冷静になれ、キッド。」

「至って冷静だぜ？オレは同じ過ちを二度繰り返すことは絶対になり。つまり、今後オレの正体が奴らに暴かれるような事態は起こらねえ。」

それはハツタリなどではなかった。

しかし、それまで黙っていた少女が、鋭い視線を投げかけながら口を開いた。

「あら、随分な自信ね。
未来で何が起こるかなんて、どんな優秀な奇術師にもわからないものよ？」

“絶対にない”なんてタカをくくって、思いもよらぬ所から攻められたらどうする？」

本当は、わかっている。

“絶対”などと言葉にしてしまうのは、そこに僅かながらも不確かさがあるからだ。

そこに望みが含まれるからこそ出てくる台詞なのだ。

しかし、その心の揺れを、決して見せてはならないと思った。

「それはその時その時、考えればいいことですよ。
当然、未来のことなどわかるはずもない。
しかし、予期せぬ事態をどう切り抜けるか、それを考えるのが面白いんだぜ？」

「わからないの？」

彼女の語調が、わずかに強みを増す。

「もしこの先、貴方が奴らに拘束されることがあったとしたら・・・
すぐに殺しはしないでしょうね。」

ギリギリの所で生かしておいて、次に、貴方が最も失うことを恐れている“誰か”を、探し出すでしょうね。」

「・・・・・・・・」

「そして、動けない貴方の目の前に彼女を引きずり出し、容赦なく縛り上げ、それから最も残虐な方法で」

「ヤメロ！！！！」

自分の声で我に返った。

「これは、あくまでも例え話。でも、可能性がゼロじゃないことは貴方もわかっているはずよ。」

「なあ、キッド……。少なくともオレはオメーと似た状況に立たされている。しかし決定的に違うのは、オメーが表舞台を飛び回っているということだ。あまりに目立ちすぎる。

得体の知れない連中に命狙われて、それでもやめねーのには何か理由があんだろ？わざわざ聞きやしねーけどよ……」

「はは……。なんでもお見通しってことか……」

「どうするか決めるのはオメーだ。なんとなく、ほっとけねえと思っただけだ。」

「・・・・・・・・」

「じゃ、オレたちはこの辺で・・・」

探偵くんが椅子からぴょんと下りると、科学者さんもそれに倣う。

そして彼女は最後に言葉を残した。

「守りたいものをどうやったら守れるのか、よく考えなさい？」

二人が去っていった部屋の中で、オレはひとり思考を巡らせる。

そこから、自分の感情を差し引いて導き出される答えは、何度やっても、ひとつしかない。

ひとつしかなかった。

翌日、見舞いにきた青子に、オレは、距離を置くことを告げた。

&1t・13>・忠告（後書き）

こんにちは。この話も13話ってことで・・・

長いよね（笑）飽きずに読んで下さってる方、本当にありがとうございます
ざいます（*´、*）

いま、折り返し・・・ってくらいかな？たぶん。

もうちょっと長くなるかな・・・

その時の思いつきで細かいエピソード入れたりするので、終わります
での長さはつきりわかりません（笑）

うまく文章まとめる力が欲しいです（T・T）

でも、もしよかったら最後までおつき合ってくださいっ（、・ω・、）
モンキーガールでした！

<14>・進路（前書き）

こんにちは。モンキーガールです。

ここまで読んで下さりありがとうございます。

ここから時間軸が第一話と同じ現在に戻ります。

連載開始当初から読んでる方は、最初の方を忘れてしまっているかなと思って、念のため（^ー^;）

この後も数話ごとに回想と現在を繰り返します。

わかり易くなるように書きたいと思いますが、一応、先にお知らせしておきます（*^^*）

今後もし宜しく願います！

<14> 進路

・

・

・ ・ ・ ゴトン

・ ・ ・ ガタンゴトン

『次は、米花に止まります．．．お出口は変わりました．．．』

無機質なアナウンスで突然現実に取り戻された。

間もなく工藤の豪邸がある米花に着くところだ。

それまでの回想を蹴散らすかのように頭をくしゃくしゃとやりながら、電車を降りる人の波に乗った。

工藤のヤツ、頼みつけてなんだ．．．？

など一応気にしてみるが、どうせ大したことではないだろう。

その予想は、工藤邸の玄関前でしゃがみこんでいるヤツの姿を目にした瞬間、的中したと悟った。

「あ！くろば！早かったじゃねーか！」

そう言い終わるよりも早く、踵を返して元来た道を戻ろうとしたオレは、慌てて門を飛び出してきた工藤に腕を掴まれた。

「なんで逃げんだオメー！うちに来たんだろ？」

「ああん！？オレはカギのトラブル110番じゃねえぞ！！」

「あ、わかつちゃった？」

白い歯を見せて、にいつと笑う稀代の高校生探偵に、ヤレヤレと盛大なため息を返すと、やたら豪華な門の中へと足を踏み入れた。

ポケットからキーケースを取り出し、スチール製の小さなスティックを手取る。

それをドアの鍵穴に差し込み、ちょいつと動かすと

ガチャリ

と音を立てて鍵の開く音が響いた。

「はい」

「・・・へっ！？」

「だから、開いたっつの！」

「早っ！！！」

工藤は本気で驚いた顔をしながらノブを廻し、ドアを引いた。

「うおー！入れたぜ！助かった！サンキュな！とりあえずうちがつてけよ！」

コイツから礼を言われるとは、よほど困っていたらしい。

リビングに入ったオレは床にカバンを放り、どかっとソファに沈み込んだ。

ここのソファはいつ来ても座り心地が良く、目を閉じるとこのまま寝てしまいそうになる。

「寝るな！」

と、言いながら工藤がスタバのチルドカップコーヒーを差し出した。

あの子が来た時に飲む用か？

なんて思いつつそれを受け取ったちょうどその時。

玄関のドアが開く音と・・・

「新一、いるのー！？」

と、いま脳裏を掠めたばかりの少女の声が聞こえてきた。

「えっ！蘭！！オメーそれ、どこで！？」

「普通に昇降口に落ちてたわよ！とりあえず部活は自主練だったから持ってきたんだけど・・・新一のケータイ、ずっと話中なんだもん！どうやってカギ開けたの？」

「ああー警視庁から電話が入って長話してたんだよ。わりい。・・・てか、実は外に置きカギがあって・・・」

「そうなの？でも危ないじゃない、そんなの！」

そんな話をしながら二人がリビングへと入ってきたので、すかさずオレは立ち上がり、手をひょいと上げた。

「あ、ども！お邪魔してます！奥様！」

「あーっ黒羽くん！来てたの！？わあ、久しぶりー！！」

名探偵が愛してやまない彼女はオレの顔を見るなりぱあっと表情を明るくして駆け寄ってきた。

すかさずオレは彼女の前に手を開いて何も無いのを見せ、軽く握った次の瞬間、薔薇の花を出してみせた。

「どうぞ、奥様。」

「すごーい！・・・って、奥様はやめてよー！」

彼女が少し頬を赤らめてその花を受け取った。

そんなオレらに嫉妬してか、工藤は仏頂面で割って入ってくると、オレの片手に握られていた未開封のカフェオレをスツと取り上げて彼女に差し出した。

「コーヒー淹れてくんねーか？こないだ買ってきた豆、あれで。」

「うん！黒羽くんは砂糖とミルクはダブルだね？」

「さっすがー！わかってるね、若奥様っ！」

「もー、やめてよー。」

笑いながら、彼女がキッチンへと入っていった。

「いいねえー・・・くどーくん・・・羨ましいよ君が・・・！
あのような可愛い奥様と夜な夜なあんなことやこんなこと・・・」

「デメエ殺されに来たか。」

「この家のカギ開けに来たのを忘れましたか？」

「うるせえ。蘭で変な妄想すんな！」

「名探偵知ってるか？妄想は自由だ。そして正義だ。」

「いいから今すぐテメーの頭からそれを消せ・・・!」

軽口を叩きながら、オレはある話を切り出すタイミングを伺っていた。

その機会は、コーヒーを運んで来た彼女の一言で、あっさり訪れた。

「黒羽くんは進路どうするの？東都も余裕の判定なんでしょ？やっぱ東都？」

コーヒーをテーブルに置く彼女はオレが首を縦に振ると思っている。

しかし・・・

「いや、オレはマジシャンの修行。」

「えええっ！？修行って・・・どういう・・・」

「生前オヤジが世話になったマジック界の神って人がアメリカにいるんだ。その人に弟子入りする。」

「えっ・・・!？」

そこで初めて、工藤が無言のまま顔を上げた。

「そっかぁ・・・！すごいなあ。でも黒羽くんなら修行なんかしなくともすぐプロになっちゃいそうだけど！」

「いや、ああいう世界は腕だけじゃなく、横の繋がりや縦の関係も重要なんだ。華やかそうに見えて、そのへん地味にやらねえと潰される。まあその土台を築いておけば、あとはやりてーこと好きにやれるしな。そのための修行期間ってわけ。その後の活動拠点も向こうになるかな・・・」

「そうなんだー。ずっと向こうなんだ・・・。なんか、ちょっと寂しいなあー。」

眉をへの字にする彼女の様子が社交辞令ではなさそうで、オレが思わず尻を下げた次の瞬間、工藤の遠慮無い直球ストレートが向けられた。

「中森警部んとこの娘、中森青子だっけ・・・彼女はどーすんだよ？」

その口調で空気が変わる。

彼女はそれを察知したかのようにトレーを持ち直すと、にっこり微笑みキッチンへと下がっていった。

相変わらずこのカップルは長年連れ添った熟年夫婦みたいだ。

阿吽の呼吸。

絶対の信頼関係。

赤い糸なんてものは大昔の逸話を都合いいよう作り上げた単なる伝説だとは思わないが、この二人には本当にそんな糸があるのではないかと思う。

工藤が江戸川コナンというガキになっていた時、そして元の姿を取り戻すために闘ったその時・・・二人がどれ程の苦難を乗り越えたかオレは知っている。

オレは・・・

オレらには、それだけの絆が無かったただけの話・・・

「は？なんであいつの名前が出てくんだよ。」

ポーカーフェイスを貼り付け、心のブレを読み取られないよう細心の注意を払って言葉を返した。

「待たせてんじゃねーのかよ？はつきりしてやれよ。もうオメーはキッドじゃねーだろ！」

「ああ、工藤は知らねーのか。あいつ今、彼氏持ちだから。」

「・・・・・・は？」

「キッドが最後の予告を敢行した3月のあん時、もう既に別の男と

付き合ってたんだよ。ま、んなもん、本人の自由だしな。」

「んだよ、それ・・・オメーそれでいいのかよ？」

「なんで工藤がそんな顔すんだよ？いいも何も、あいつがオレを待てなかった、待ってる間に心変わりした、オレたちの仲はそんなだけのモンだったってことだろ。」

ソファでくつろぐ姿勢を崩さないオレとは対称的に、

工藤は体を折り曲げ祈りのポーズにも似た格好で、組み合わせた手に額を押し付けている。

何をそんなに考え込んでいるのか、オレたちのことなどこいつに関係ないだろう、と本気で疑問に思い始めた時、工藤が顔を上げた。

「オメーにずっと黙っていたことがある・・・」

「な、なんだよ・・・！？」

突然、工藤は突き刺すような真剣な眼差しでオレを見据えた。

「やつぱり、あん時、話しておくべきだった・・・」

「だから何だよ・・・？気になんじゃねーかさっさと言え。」

「・・・」

「おい！」

意を決したように、工藤が口を開いた。

<16> 眞実

「オメーが腹を撃たれたあの晩…見てたんだよ、全部。」

「は？何が…」

「中森青子、彼女が。全部見ていた。」

その工藤の言葉に思考が一瞬停止したのち。

途端に胸を鷲掴みにされたような息苦しさ襲われた。

・・・こいつは何を言ってるんだ？

青子が見てたって？

あの現場を？

背中を嫌な汗が流れる。

ジリジリと沸き立ってくる焦燥感を押し込めて、無理矢理に思考を巡らせた。

青子があの時いた・・・

てことは・・・・・・・・

「なるほど。なんだか知んねーがあん時、オレの正体は青子にバレてたってわけか。

それなら尚更この現状に説明がつくじゃねえか。
心置きなくアメリカに飛べるってもんだぜ。」

憎むべきキッドがオレとわかっていたなら、二人が離れたことは至極当然だ。

そんな状況でオレの後ろ髪を引くものなど本当に何も無い。

そう考えて出た言葉だった。

しかし、工藤の話はそれを大きく否定するものだった。

「バーロ！そうじゃねーんだよ！」

「は？何がだよ！？」

「オメーの意識が飛んだあと、現れた彼女がキッドの素顔だとか腹の傷を見て取り乱して泣き叫んだ後、
次になんて言っただと思う？」

「・・・・・・・・さあ？」

「父親が捕まえに来るから早く隠さなきゃなんねえって・・・横にいるじいさんとオレに訴えてきたんだぜ・・・？」

そこで気付いた。彼女がオメーと親しい間柄であり、中森警部の娘・・・ってことにな。こんな複雑過ぎる関係、ありえねーだろ。」

「・・・あいつ・・・」

あまりに意外だった。

父親をあんなに慕っている青子が、正体がオレだったとはいえキッドを庇うなど・・・信じ難い光景だと思った。

「そんな彼女の姿を目にしてるうちに、なんか・・・色々思うところもあってだな・・・気付いた時には隠蔽工作を指示しちまっただよ。」

嘘の証言吐くなんて事すんのは後にも先にもあの時だけだ。どうかしてると今でも思うぜ。」

その時の青子の姿が名探偵の最愛の人にダブったんだと、容易に想像がついた。

「ハハ・・・泥棒を逃がした理由は女かよ？」

「あのなあ・・・彼女がどんだけの決意でオメーを逃がそうとしたのか・・・」

「わかってるっつーの・・・！！」

オレは、意識が戻った病室での青子を思い出していた。

正体を知りながら、それを受け止めよう必死だったんだ。

それはどれほどの葛藤を与えたか・・・想像を絶する程だったかも知れない。

それでも、何も知らないふりして、オレを求めてくれたあいつから・・・

逃げていたのはオレだったんだ。

「・・・そうか。黙っててくれって彼女に頼まれたとはいえ・・・
やっぱ、オメーには言っとくべきだったな。」

「いや、例えあの時、聞いていても結果は同じだったと思うぜ。工藤が気にする必要ねーだろ、気持ち悪い。」

そう。

関係ねえ。

色んな事情とかそんなもん全部薙ぎ払ってでも「待っててくれ」と、あの時そう言えなかったことが、全てだ。

しかしそれで青子がいま他の誰かと幸せにしているなら、オレはそ

れを甘んじて受け入れる。

ガキの頃から、あの隣にはオレがいるってなんとなく思ってきたが、オレじゃなくてもアイツを幸せにできるなら、それでいい。

そういう愛の形があったっていいだろ、名探偵？

と、心の中で呟いた。

<17> 自問自答

眩いほどの、白。

月を背にして、鮮やかな手口で犯行を繰り返す、世紀の大泥棒。

人はそれを、こう呼ぶ。

「月下の奇術師・・・ってか。」

久々に自室から繋がる隠し部屋に足を踏み入れ・・・

あの日以来、一度も袖を通していないそれを、ただなんとなく見つめていた。

ほんの数ヶ月前までの出来事だが、まるでずっと昔にあったどこかのおとぎ話にすら思える。

そんな自分に、自嘲気味に笑みを浮かべながら作業台の椅子に腰を掛けた。

もし、オレが怪盗キッドではなかったら。

あのまま、普通の男子高校生として学校行ってバイトして友達と遊んで宿題やって恋愛もして、何の変哲もないが、それなりに幸せといえる日々を送っていただろう。

しかし、オレは白い怪盗である事を選んだ。

自らの信念に従って突き進む事を選んできた。

後悔など微塵もない。

それでも、もう少し、違う選択をしたのなら……

今頃、あいつと肩を並べて歩いていたのだろうか。

白く柔らかい青子の手の感触がオレの左手に蘇り、思いがけず息苦しさを覚えた。

そつと掌を開き、何もないそれ見つめながら、孤独を思い知る。

当然の報いなんだろう。

それでも、やっぱりあの時は。

ああするしか、なかった。

あの小さな探偵に忠告を受けた翌日、オレは決意を口にした。

『青子……』

あのさ、理由は言えねーんだけど……
距離を置きたい。』

『……え?』

『でもクラスメイトとして過ごすのは構わねーから……。
青子の事が嫌になったとかじゃねーんだ。
オレの問題なんだ……。
できるか?』

――オメーを守るためなんだ。

『何言ってるの……。できるわけないじゃない……。どうして……。?
?』

『理由は言えねえ』

『……。ねえ快斗。』

青子、快斗の話、きつと受け止められると思うよ?
だから、ちゃんと言ってくれなきゃわからないよ……。』

『それだけは、言えねーんだ……。』

……オレがキッドであることだけは、言えねーんだよ。

『どれくらい・・・の間?』

『それはわからねえ。わかんねーから・・・待たなくていい。』

『何それ・・・なんでそうなるの?』

・・・いつ果たせるかもわかんねー約束で、オメーを縛り付けておけるかよ・・・。

なあ、名探偵。

あんたみたいに

いつ帰れるかもわかんねーのに

『待っててくれ』

そう言えたら何かが変わっていたのか。

今も時々、そんなことが頭を過ぎっては、消えていく。

オレは甘えてたんだな。

なんだかんだいって青子は、オレを待っててくれるだろうって。

待たなくていいなどと余裕のあるふりして、カッコつけて。

本当は待っててくれって思っていた。

あの時本音をぶつけていたら、何かが変わったか？

わかんねーけど。

・・・

あの日から、青子と過ごす時間を自ら手放したオレは、キッドとしての仕事を次々にこなしていくようになった。

それこそ、寝る間も惜しんでビッグジュエルの情報収集、下見、計画の作成、根回し、準備、そして実行を繰り返した。

一刻も早く全ての決着をつけ、白い衣装を脱ぎ、あいつに会いに行くために。

連中に命を狙われる率も格段に上がる。

しかし怯んでなどいられない。

あちらからご丁寧に挨拶に来るなど、尻尾を掴むチャンス以外の何ものでも無い。

手厚く出迎えて接待してやらなければならない。

何度目かの対峙で、ようやくボスがお目見えした。

<18>：最後の日

「随分、荒らし回ってくれたわね。どこから湧いた偽物か知らないけど・・・」

奴は年齢不祥な女だった。

真紅のタイトなドレスに毛皮のロングコートを羽織り、腰まで届くかという黒髪を風に靡かせている。

「・・・本物は8年前に貴女が殺したのですからね。

そう、私は貴女にとっては偽物・・・しかし、そんなことはどうでもいいんですよ。」

こいつらが・・・

こいつが・・・

オレの最も尊敬するマジックの師匠であり、世界でたった一人の、父親の命を奪った者。

父と子が共に過ごすはずだったこれまでの8年間を奪った者。

大人になったら酒を汲み交わそうと約束した未来を奪った者。

母親から最愛の夫を奪った者。

家族3人が描いていた未来を全て、全てぶち壊した者。

「偽物さん・・・この状況でどうするつもり？地上150メートル、あなたは既にいくつもの銃口が向けられている。あとは死、あるのみ。」

その宝石を寄越して、二度と姿を現さないと約束するなら逃がしてあげてもいいのよ。」

オレの手の中には、これから月に翳すはずだった大粒のアレキサン
ドライトが握られていた。

少し離れた所から、黒いスーツに身を包んだ連中が拳銃を構えている。

「そりゃあどうも。」

しかし、お美しいあなたに似合いそうなこの赤い雫・・・贈って差し上げたいところだが、そうもいきません。

「

「・・・そう。交渉決裂ね。」

女がスツと手を挙げて何かの合図を出そうとするのを、遮るように言葉を投げつけた。

「しかし、死ぬつもりもありませんよ？」

パン！パン！パパパン！！！！

屋上に響いたのはオレが仕掛けていた爆竹。

そんなシヨボい仕掛けでも、奴らにほんの一瞬の動揺を与えるには十分であった。

次の瞬間、閃光弾と煙幕を同時に使って視界を奪う。

その間にオレは少し高い隣のビルに移る。

さらに隣のビルの屋上では、情報をリークされた日売テレビ局のカメラが生放送を開始していた。

「どこいった!？」

「消えたぞ・・・!」

「くそっ!」

「ばかね!キッドはあそこよ!」

連中が銃を構え直すよりも早く、今も手の中でジリジリと力を放つそれを空に高く掲げ、月に翳した。

「やっと、会えたな」

その時、カメラが捉えたキッドのラストショーは、日本のテレビや街頭ビジョンだけでなく海外でも中継され、伝説の如く語られた。

ショーを終えたキッドが暗幕で姿を隠したあと、キッド確保用とみられていた数機のヘリが連中のいる屋上を目がけて急降下し始めた。それに気付いた組織の組員が屋上の出入り口に向かって走り出そうとすると、今度はそのドアを勢いよく破って飛び出してきたのは、警察の機動隊。

ギリギリまで高度を下げたヘリからは、特殊部隊が次々に屋上へ着地をし、見事に奴らを抱囲した。

機動隊の最後尾から現れたのは。

工藤新一。

まさか、天下の大怪盗が日本警察の救世主と手を組んで、全うなやり方で自分らを追い込むなどと、夢にも思わなかっただ。ろう。

元の姿に戻った記念に相応しいドタバタ劇にはなっただろ？・・・と聞こえるはずもないが目下の名探偵に呟いた。

この日を最後に、怪盗キッドは多くの謎に包まれたまま姿を消した。

&l t: i 8 & g t: 最後の日（後書き）

こんにちは！

久々のあとがきのような気がします。

とりあえず、まず謝っておきますi i l — l i — — — i l

— — l

戦いを書けるような技量がなくてごめんなさい（泣） — — — — —
基本、恋愛の物語なので許してください — — — — —

そんなわけで、もしよかったら感想なんかもお待ちしています・・・

<19>すれ違い

最後のショーから2日後、教室に入るとキッドの話題で持ちきりだった。

青子はというと、一人席でボケーッと頬杖をついていた。

父親が最後までキッドを取り逃がしたから落ち込んでいるんだろう。

しかし、もう青子にも寂しい思いをさせずに済む。

だいが青子を待たせてしまった。

もうオレを引き止めるものは何もない。

ようやく、あの時の約束を果たす事ができる・・・

そんな風に思いながら覗き込むようにして「おはよ！」と声をかけた。

「あ・・・お、はよ・・・」

これまでもクラスメイトとしては普通に過ごして来たのに、その日は硬い表情でなんだかよそよそしい返事が返って来た。

「なんだよ？まだ寝ぼけてんのかよ？」

「・・・ね、快斗。今日、お昼一緒に食べない？」

「えっ？あ、ああ。べつにいいけど・・・」

距離を置き始めてからは二人きりになる事も避けてきたので、この日の突然の青子の誘いには驚いた。

何かある・・・そんなオレの予感是最悪な形で当たった。

昼休み。中庭の花壇まで連れていかれ、二人で並んで弁当箱を開けた。

学校でこんな風に二人で昼休みを過ごすなど、まるで・・・なんて少し浮かれたことを後悔するのはすぐこの後だった。

「青子ね・・・いま付き合ってる人が・・・いるの。」

玉子焼きを一口、飲み込んでから何を言い出すかと思えば。

考えてもいなかった言葉。

最悪すぎて、予想もしてなかった事態。

“アオコネ・・・イマツキアッテルヒトガ・・・イルノ”

たった今、この耳ではっきりと聞いたはずのフレーズをゆっくり頭の中で反芻する。

そして、どう考えても、捻りようもなく、青子は他の誰だか知らね

ーがそいつのものになったのだと理解した。

こういう時こそ、得意のポーカーフェイスでにこりと笑って「そーなんだ？青子がそれで幸せだっていうんじゃないんじゃない？ねえ？」とでも言えれば良かった。

しかしその時のオレは、無表情のまま黙って目の前の弁当箱に蓋をした。

それを片手で掴むと、不安そうな顔をした青子をそこに残り、無言でその場を立ち去った。

なんでそんな事をしたかも、よくわからない。

ただ、あのままあの話を横で続ける余裕など、オレにはなかった。

校舎の影に入ると、壁にもたれかかり、そのまま崩れるように座り込んだ。

感じた事のない胸の痛みに押しつぶされそうだった。

呼吸をすることも苦しいとさえ感じた。

ズキズキ・・・痛くて、苦しい。

とはいえ、あの場に残された青子の気持ちを考えると、酷いと思う。だいたい「待たなくていい」と言ったのはオレであり、その通りにした青子は微塵も悪くない。

それでもオレはしばらくの間、青子の隣にオレ以外の男が肩を並べているシルエットを想像しては心に渦巻く黒雲を拭い去れずにいた。青子に話しかける事すらできなくなってしまった。

笑って話す、自信がなくて。

数日後の放課後、青子と仲の良い恵子に呼び出された。

空き教室に入るなり、恵子は目に涙を浮かべるのでぎょっとしてしまった。

「快斗くん、青子から、聞いたんでしょ？」

この間の昼休みの事を言っているらしく、オレは短く「ああ。」とだけ返事した。

「青子、ずっと快斗くんのこと、好き・・・だったんだよ。でも、快斗くんが急に冷たくなっちゃったってずっと落ち込んで、やっぱり自分じゃダメなのかなとか、色々悩んで、それでやっと最近、そういう気持ちに整理つけて、新しい恋を始めたんだよ・・・。」

新しい恋。

その言葉が胸に突き刺さる。

「だから、青子の事、優しく見守ってほしいんだ……。今までみたく、幼馴染みでいて欲しいし……」

どうやらオレが怒って無視してるように見えているらしかった。

実際は、どんな顔をして青子と話せばいいかわからなかっただけ。

抱いたことのない感情を、どう処理すればいいかその術を知らなかった。

さらに恵子の言葉尻からは

“いま青子は幸せにしているのだから変に思わせぶりな行動をして動揺させないで欲しい”
というのを感じて取れた。

つまりは。

オレと青子はもうただの幼馴染みでしかない、ということを知り知った。

その数日後。

駅前の通りを手を繋いで歩く青子と知らない男の姿を目の当たりに

し、オレは青子へ抱いていた想いを全て心の奥底に封印した。

でも、もうオレたちは幼馴染みに戻ることも、できなくなってしまう。
った。

<20>side青子

? ? ?

．．．．．ん

．．．．．ちゃん

「．．青子ちゃん!!」

ハッと気付くと、そこは電車の中。

「あれ、あたし、寝てました．．．?」

「うん、気持ち良さそうに寝てたよ。もうすぐ着くから起こしちゃったよ、ゴメンね?」

「ああ、ううん、ありがとう．．．」

そう言って隣を見上げると、優しく笑う彼。

無造作にセットした少し長い茶色の髪。

切れ長の眼。

すつと通った鼻筋と薄い唇。

私を校門で待つてくれている時、うちの女子生徒にかっこいいって騒がれている。

ひとつ年上の大学生・・・私の、彼。

恩田さん、そう呼んでいる。

下の名前である、哲と呼んでいって言うてくれるけど、元々予備校の先輩だし、なんか呼べずにいる。

敬語もやめてほしいっていうけど、どうしても使ってしまうから、もう今は何も言われなくなった。

やっぱり。

私が、名前で呼べたのは、後にも先にも、あいつだけだった。

そんなことを思い浮かべ、慌てて頭を横に振った。

「どした？さつきも、なんか寝言いつてたよ。青子ちゃんって、キツドのファンなの？」

「ええっ！？ち、違います！！あの、うちのお父さん実はキツド専門の警部で、それで毎日聞かされてたから・・・あ、あたしなんて言っていました！？」

「キツドがどうの・・・って聞こえたただだよ。ていうか、青子ちゃんのお父さん、凄いな！」

ホッと胸を撫で下ろす。

まさか、彼のいる横であいつの夢を見るなんて・・・

あんな広告、目の前に貼ってあるからだ。

どこかの、少し気の早い花火大会。

今も、繰り返し夢に見る。

幻のような、夏の出来事。

忘れてしまいたいのにな、五感が憶えている。

流れる祭り囃子。

夜店から漂う美味しそうな匂い。

みんな笑顔で歩いていて。

そして、右手に触れた感触。

体を震わす花火の音。

少し赤くなった、あの横顔。

消えてゆく光の粒の煌き。

それから

誕生日に貰った、クローバーのネックレスと、少し大人の香りがする香水。

そして、白。

赤い血で羽を染めた、白い鳥。

叫び声。

私の、叫び声————！。

『逃げたんでしょ？』

誰かが責める。

もう一人の、自分。

『あなたは嘘をついてる』

違う・・・

『自分に嘘をついてる』

そんなことない・・・

あの日、私はちゃんと、胸に誓った。

知ってしまった真実はあまりに残酷で

それでも

それでも・・・

全てを受け止めることを。

なのに、どうして？

『どうして隣に彼がいないの？』

もう一人の私が、忘れさせまいとしているかのように頭の中で呟いた。

<21>恋ころ

気付いたのは、高校二年の梅雨が始まった頃。

傘を忘れた快斗を仕方なく半分入れてあげて、そのまま快斗の家に上がり込みくつろいでいた。

ココアを二つ、テーブルに置いた快斗がソファの隣に座り、テレビをつける。

私は漫画の続きを借りて読む。

いつもの光景。

テレビに映し出されたアメリカのショービジネスのドキュメンタリーを観て、快斗がポツリ呟いた。

「オレもいずれはアメリカに飛んで、マジシャンの頂点にたつてやるぜ・・・」

突然そんなことをいうから、何の気なしに思わず言ってしまった。

「えーっ！快斗アメリカ行っちゃったら、つまんないなあ・・・」

言い終わってから、しまったと思った。

別に特別な意味はない言葉だったけど、絶対からかわれる・・・！

その予想は、大外れ。

「じゃあオメーもアメリカに来りゃいいじゃねーか」

多分、快斗も何も考えずに言ったのだと思う。

言った後だってケロリとしちゃってソファにだらしなく座りながらテレビに釘付けだったし。

でも、私は・・・

私の心は早鐘を打って止まらなかった。

だって、プロポーズみたいじゃない。

そうじゃないのはわかってるけど、でも凄くドキドキして、急に快斗の事を意識し始めてしまった。

だって。

本当にそうならいいのにつて、思った自分の気持ちに嘘がなかったから。

それから、その気持ちに恋だと気付くのには時間はかからなかった。

それまでも、いつも快斗の隣にいたし、それはこれからも変わらないような気がしていたし、快斗の隣には自分がいたいと思っていた。

それからというものの、快斗を見ては心臓がぎゅうつつとなるのを感じるようになった。

斜め後ろの席は最高の観覧席。

いつの間にか背も伸びちゃってるし、背中もなんか広いし、腕もがつちりしてて、凄く男の子って感じ。

ペンを握る指は思ったより長くて、細くて関節が少しゴツゴツしてるんだな・・・とか。

手、大きいなあー、繋いだらどんなふうなのかな・・・。

なんて。

ドキドキしながら盗み見る。

あ、あくびしてる！また夜更かししたんだな！

今日の髪型、好きだなー。

わっ。消しゴム消えた！授業中にマジックの練習してるし！でも凄いなあ。

見てるだけで、幸せな気持ちになる。

それから帰り道。

スーパーの外に繋がれたどこかの犬に戯れ始めた。

可愛いなあー・・・犬もだけど、快斗も。

無邪気に笑うその顔から、目が離せないよ。

そして快斗の家にいつものようにお邪魔して、ソファの隣に座る。

テレビをつけたまま眠ってしまった快斗。

ここぞとばかりに、寝顔を覗き込んだ。

男の子なのに、綺麗な顔立ち。

眉、目、鼻、唇、顎のライン、ひとつひとつが整っていて、改めて見ると芸能人みたいにカッコイイ。

こんな彼にいま一番近いのは、もしかして青子かな・・・？

なんて考えると嬉しくなってしまう。

もし、もし恋人になれたら、そしたらこの唇とキス・・・したりするのかな・・・？

そんな妄想をして、胸をドキドキさせる。

いいなあ・・・

心の中で呟いた。

快斗とずっと一緒にいたいし、くっついたり、抱きしめられたり、優しくされたりしてみたい。

でも、でも青子じゃ無理だろうな・・・

快斗はきつと、青子のことは幼馴染みとしか見てないだろうな・・・

カッコイイ事が好きな快斗だから、きつと綺麗で可愛くていかにも女の子っていう子のほうが、似合うよね・・・

ズキン・・・！

胸に痛みが走る。

私、思ったより、快斗のことが好きになってる。

想いを遂げたくて、苦しいよ。

「好きだよ・・・」

寝ている快斗の耳元で、そっと呟いた。

&1t・21>・恋ころ（後書き）

こんにちは

青子の回想が始まりました

私としては、やっとここまで来た（笑）という気持ちです。ハイｗｗ
せめて30話で収めたいと思ってただけど、なんかもうちょっと
いってしまいそうな・・・

なんでだろ（・ω・）文章まとめる力が足りないんだなあ。た
ぶん。

このようなだぶんですが、嬉しい事に読んでくださってる方はいら
っしゃるようで、12000PVとなりましたー！！

ありがとうございます。

これからも私の妄想癖におつき合い頂けると幸いに存じます。

とりあえず、この青子ちゃん編は二日おきにだだーっと更新の予
定です。

では！！

<22>夏の記憶

快斗への気持ちに気付いてから初めての夏休みがきた。

少し前から通い始めた予備校では同じ学校や他校の人とも仲良くなつて、グループで海に行った。

快斗以外の男の子と遊びに行くのなんて初めてだったけど、やっぱり、快斗と過ごすほうが楽しい・・・そんなコトを改めて実感していた。

何よりも間もなくやってくる花火大会が凄く待ち遠しくて。

“ 浴衣で、快斗と二人、歩いてみたいな・・・ ”

そんな小さな夢を叶えるためにわりと必死になってた。

だから、快斗が1年生の子と目の前で約束した時はなんにも言えないほどショックだった。

借りていた浴衣を快斗の家に返しに行った時は、お母さんの前で泣いてしまったし、
そのあとうちまで快斗が来てくれた時は嬉しくて、また涙をこらえるのに必死だった。

陽の傾き始めた玄関先にふたりの長い影が並ぶ。

頭に触れた手が凄く優しく、心臓がひっくり返りそうだった。

そして、あんなに可愛い女の子との約束をやめて、青子のところに来てくれた事を『オレがそうしたかった』と言ってくれて、嬉しすぎて、こらえてた涙が“好き”で気持ちと一緒にどんどん溢れてきた。

肩を引き寄せられ、快斗の胸に寄りかかった時。

彼の心臓も大きな音で早鐘を打っていた。

走ってきたからかもしれないけど、同じくらいドキドキしているんだって、嬉しくてそっと目を閉じた。

その音に心が落ち着いた。

数日後の花火大会。

初めて、手を繋いだ。

多分、青子がドン臭いからはぐれないようにだったんだと思う。ただ、それだけだったのだと思う。

でも、涙が出そうなくらい嬉しかった。

快斗の手は、青子の手をすっぽり包んでしまうほど凄く大きく感じた。

ホントは茶化して恥ずかしさを誤魔化したかったのに、快斗への想いが指先から伝わってしまう気がして、何もいえずに俯いて歩く。

カラン コロンと二人の下駄の音が響いて、それが永遠に続けばいいと本気で思った。

新学期。

パリのお土産といって貰った、誕生日プレゼント。

想いを告げてしまおうとした青子を遮り、「待っててくれ」と言った快斗。

でも、それで同じ想いなのを確信して、いつまでも待とうって、そのネックレスに誓った。

でも、何もかも、壊れてしまった。

快斗は、怪盗キッドだった。

あの日。

ただ、あの男の子がビルを昇って行くのを見つけて、ちょっとした好奇心で、屋上まで追い掛けてみただけ。

きっかけは、たったそれだけだった。

横たわる白い衣装の人物に、ブルーパロットのおじさんが『ぼっちゃま』そう叫びながら駆け寄ったのを見た瞬間、背筋が凍った。

“お願い、違つて・・・”

心の中で叫びながら、近付いた。

でもそれは紛れもなく青子の大好きな、快斗。

その後のことは、よく覚えてない。

でも、快斗を絶対に助けたくて、それだけは心の中で強く思っていて、泣きながら助けてって叫んでいたと思う。

とりあえず我に返ったとき、私はブルーパロットに居た。

おじさんが、温かいココアを入れてくれた。

快斗は絶対に助かると、言ってくれた。

それから、快斗を許してほしいとも。

どうすればいいかなんて、そんなのわからなかった。

快斗のお母さんから、快斗が運ばれた病院の名前がメールで届いた。

でも、その日は一人で家に帰った。
ぐちゃぐちゃの気持ちのまま枕を濡らして一晩を過ごした。

いっぱい泣いて、いっぱい考えた。

そして快斗の事を、いっぱい思い浮かべた。

それこそあの時計台の前で快斗と出会った幼い日から、日が暮れるまで泥だらけになって遊んだ日々に、お互い成長してちよっと一緒にいるのが照れくさくなった中学時代も、やっぱり一緒にいると落ち着くなつて気付いた今までのことまで、全部思い出していた。

快斗はいつだって、周りに笑いや幸せを運んでいた。

快斗がそこにいるだけで、みんな笑顔になる。

泣いている子も、落ち込んでいる人も、快斗はまるでマジックのように元気にしてしまう。

そんな快斗がキッドだからって、憎めるはずがない。
事情があるに決まってる。

青子が一番知っているのだ。
彼の良さは、青子が誰よりも知っている。

もし、彼から話してくれるなら、全てを受け止めたいと心に決めた。

<23> 選んだ道

その決意が無になるまでは、あつという間だった。

『待たなくていい』

青子がキッドの正体を知ってしまった事を、快斗は気付いているのだと思った。

でも、それを青子の口から確かめられるほどの気持ちの余裕があるわけでもなかった。

受け止めようって思っていたその決意は、実は崖の淵に爪先立ちして、るくらいギリギリなもので、少しでも押されたら落っこちてしまいそうなほど脆かった。

待たなくていい・・・その言葉が冷たく突き刺さる。

好きな人とは、結ばれない・・・

そついう運命なんだって、抱えていくしかないのかな。

もう、ダメ・・・かな。

青子じゃ、快斗の抱えているもの、少し分けてもらうこともできないのかな。

終わりのない自問自答を、繰り返しても答えは出なかった。

「あたしは彼にとって、たいした存在じゃなかったんだと思います。」

自分なりに気持ちの整理をつけ始めた、12月のことだった。

予備校で知りあったひとつ年上の恩田さんに食事に誘われ、ファミレスの窓側の席で何故かそんな話になっていた。

恩田さんは既に推薦入学を決めていて、暇を持て余しているらしい。じゃなかったら青子のことなど誘わないだろう、そう思っていた。

「バカだな、そいつ。オレなら絶対に青子ちゃんみたいな子、放つとかないのに。」

素直に嬉しかった。

そう言ってもらえるだけで、ちょっとだけ自信を取り戻せるから、自分は本当に単純だな、と自嘲気味な笑みを漏らす。

そして

「ありがとうございます」

とだけ返した私に、彼は目を細めてポツリ、言った。

「オレが青子ちゃんの抱えてるもの、半分引き受けるよ。夏に会った時から好きだったんだ。大事にするよ？」

心底、驚いた。

正直、恩田さんは予備校でも女子生徒の憧れの的みたいになっていくくらいで、彼に何も感じない私はみんなから変わり者呼ばわりされるほどだった。

そう。全くそういう感情は、持ってなかった。

「う、嬉しいんですけど……でもゴメンなさい……」
と返すしかなかった。

それで終わるかと思っていた、新年。

恩田さんはまるで何事もなかったかのように電話もメールもくれた。

週末にはどこかでかけようと誘ってくれて、最初こそ断っていたもののだんだんそれも気が引けてきて、一度出かけてみたら思いの外、楽しい時間を過ごせた。

彼は話をするのがとても上手い。

好きな映画の話から、よく観ているアニメ、それに音楽、スポーツ

までどの話題に飛んでもネタが尽きない引き出しの多さから、思わず無言になるような時間がない。

何を話そうとか、緊張する必要も気まずい時間もないし、楽しいコトを言って笑わせてくれるので、だんだん居心地のいい存在となっていた。

少なくとも、彼と一緒に過ごしている間は心から笑えていたし、快斗への想いを募らせて胸の痛みに耐えることもなかった。

だから、2月になったばかりのあの日。

「オレやつぱり青子ちゃんのこと諦めきれない。

違う男のコト忘れられない青子ちゃんもまるごとひっくりくるめて好きだから、だからやつぱり、オレたち、付き合おう？

絶対に大切にするから。」

その言葉に、ゆっくり頷いた。

付き合うつて、結局何をするのかよくわからなかったけど、

とりあえずその日の帰りにはビックリするほど自然に、当たり前みたく手を繋がれた。

何故だか、快斗の手に触れた時みたく頭に血が集まるようなドキドキは、無い。

あるのは、恥ずかしさと、それからちよつと違和感。

あれ、どうして青子、この人と手を繋いでるんだろうっていう。

でもそれは“恋人になったから”というはつきりした理由があるからで、それならやっぱり恋人らしいコトに慣れていかなくちゃいけないのだと自分を納得させた。

<24>：最後の日

その日は恩田さんと映画を観に杯戸町まで出かけていた。

そんなに期待していなかったラブコメディーが思ったより泣いて笑える良作で、私も彼も楽しい気分のまま、少し遅い夕食をどこで食べるか相談しながら歩いていた。

すると、急に待ち行く人々がざわめき始める。

やがて、どこかに向かって走り出す人が続出した。

「おいおい、なんだ？事故か？」

「さあ・・・」

はぐれないようにと繋いだ手をぎゅっと握り締めた時、後ろから追いついて行く女の子たちが叫んだ。

「キッドだって！！！そこ曲がったビルの街頭ビジョンで今から生中継始まるらしいよーっ！！」

「まじー！？キッド様！？ヤバイよヤバくない！？ちょー観たい！
！マジ急っ！」

どきん・・・

その名前に心臓が跳ね上がる。

恩田さんという時に・・・あいつを視るのは、ちょっと気持ち的に無理かも・・・

そんなことを考えている間に、グイッと腕を引つ張られた。

「オレらも行こうぜっ!!」

明らかにワクワクした様子の彼が、私の手を引いて走り出した。

別に、抵抗できなかったわけじゃない。

やだっと言えば、観にいかなくても済んだと思う。

でも、私は一緒に走った。

やっぱり。

やっぱり、気になって仕方なかった。

今日は逃げ切れるのかな。

また怪我しないかな。

変な人たちに追われたりしてないかな。

それまでも、キッドの中継やニュースは、必ず観ていた。

そして、学校で挨拶を交わし、無事を確認してようやくホッとする。そんな毎日だった。

街頭ビジョンのある駅ビルまではすぐそこ。

既に物凄い数の群衆が歩道を埋め尽くしている。

その誰もが画面の方に顔を上げている光景は異様としか言い様がなかった。

「いたぞ！キッド！！」

「あー！いた！あそこにいる！」

「そこに隠れてたんだ！！」

一気にどよめきが起きた。

画面には、超高層ビルの屋上の淵にはためく白い衣装が小さく映っている。

それがだんだんとズームされてゆく。

片手をポケットに突っ込み、もう片方の手で大きな宝石を持っているキッドがはつきりと映し出された。

彼は手にした石をゆっくりと上に掲げると、月明かりに翳した。

「ねえ、あれ何やってるのかなあ？」

「さあ、なんかのおまじない？」

ざわめきの中、青子は息を殺すようにしてその映像を見守っていた。

やがて彼はその口元に不敵な笑みを浮かべると手を下ろし、ポケッ

トから出したほうの手でシルクハットの鍔をグイと下に引く。

そして、くるりとテレビカメラに向き直り、少年のように歯を見せて笑いながら両腕を伸ばし、声を高らかに叫んだのだ。

「レディースアンドジェントルマン！

本日は私の、最後のショーへようこそ！」

“ ??? 最後の・・・ ??? ”

ざわめきがより増していく。

「最後つてなんだ？」

「えっ！どうということ！？」

皆、口々に疑問の声を上げた。

「シーツ」と人差し指を口にあてるポーズをみせて群衆を鎮めたキッドは、

いつもより、少し落ち着いたトーンで話を続ける。

「残念ではございますが・・・

これからお見せする奇跡をもって、私はこの世界から姿を消します。

「

え？

いま、なんて言った？

姿を、消す？

本当に？

人々の叫びにも似た声が一瞬で街を大きく包み込んだ。

「なんでーっ!？」

「嫌あー!キッド様!ー!そんなの嫌あーっ!ー!」

「キッドー!ー!いなくなったら承知しねーぞー!ー!」

声が渦巻く中。

青子はその意味を考えていた。

今日が最後。

今日でキッドをやめる。

それって……！

……

でも、でももう遅い。

いや、違う。

青子が待てなかっただけだ……

この日を待てなかったただけだ……

「では、ご覧に入れましょう……」

その一言で、嘘のように群衆が静まり返った。

誰もが固唾を飲んでその様子を見守る中、気付くと私は泣いていた。

頬を流れる雫が、3月の夜風に吹かれて、首もとをヒヤリと伝う。

次から次へと、勝手に溢れてくる。

でも、しっかり、観なくちゃいけない。

見届けなくちゃ、いけない。

ギョツと目を瞑り、視界を霞ませていた涙をわざと零すと、深呼吸をして画面を見定めた。

映像の向こうでは、背後の月が彼の体の輪郭を美しく、幻想的に浮かび上がらせている。

まるでそこだけ、別の世界を切り取ってきたかのように。

人々を魅力し続けた、その凜とした出で立ちを目に焼きつけた。

そして、彼は?????

手にしていた宝石を空高く放った。

「えっ!?!」

次の瞬間。

正面を向いたまま、ジャケットの中から取り出した銃のようなものを真上に掲げ

そして

口角を片方引き上げたその表情を崩す事なく

真っ直ぐ落ちてくる石に向けて引き金を引いた。

パアアアアン?????!!!!!!!

3月の東京。

その漆黒の夜空いつぱいに
無数の光の粒が散らばり、街を眩いほどに照らした。

それはまるで、季節外れの花火のように。

あの日、

二人で並んで見上げた

空中ナイアガラのように。

キラキラと輝きを増しながら、ゆっくり無数の銀色の光が地を目指して落ちてゆく。

キレイ・・・

キレイだよ、快斗・・・

「皆様・・・ご声援、まことにありがとうございます。」

たったその一言を残して、消えゆく光の粒たちとともに姿を消した。

<24>：最後の日（後書き）

師走ですね

本日のUPが今年最後となります！。

というわけで、ながながと書いておりますこちらのお話を読んでくださっている皆様、来年もよろしく願います。

新年の休み中に続き更新できたらいいなあ、とは思っています。

よかったら、お付き合いくださいねー（＊´ω´＊）

読者のみなさまには、ほんと、まじで、めっちゃめっちゃ、重ね重ね、御礼申し上げます。

よかったらお休みのあいだ、サイトにSSなんかあったりするの
で遊びにきてください♪
では。

2010年 師走 モンキーガール（カコ）

<25>揺れる想い

キッドの最後のショーから数日が経っていた。

ほんの少しタイミングが合わない、それだけで。

思い描いていたはずの未来とは、全然違う毎日を送っている。

あの日、銃弾に倒れた快斗。

その快斗が口にした、距離を置きたいという発言。

最後、盗んだ宝石を返さずに粉々にした行動。

その後流れた、マフィアの一斉逮捕のニュース。

点と点が、一本の線で繋がった。

理由はわからないけど、泥棒をするのは何か目的があって、それに敵対していたのがあの捕まった組織で。

そんな危険な中にいたんだって知ったら、あの時どうして快斗に突き放されたのか、わかる気がした。

なんとなく、だけど。

でも、私にはもう、他に付き合っている人がいる。

その彼を裏切れない。

大切にしてくれているのに、それを無かったことになどできない。

あれからそんなことばかり、考えていた。

ベッドに寝ころんだまま、ふと窓辺を見上げると、

カーテンの隙間から覗く半月が、闇に浮かぶ雲の切れ端を妖しく照らしている。

その光に、心にいつもいる彼の影を重ねて、

「時間が戻せたらいいのにね・・・」

小さく呟いた。

何が正しくて、何が間違っていたかなんて、運命を目の前にしたら無意味なだけ。

今、目の前に起きている現実を抱えていくしかない。

過去には戻れない。

部屋の隅に置いてある夏祭りのお面も、机の奥にしまっただけあるネットケースも香水も、もう、過ぎた日の色褪せた思い出にしかない。

でも、どうしても、乗り越えられない壁があつて・・・
だから精一杯、いま自分を見ってくれる人と向き合つていこうと思つていた。

でも、どうしても、乗り越えられない壁があつて・・・

「恵子って、キス、したことある？」

昼休みの時間。

すっかり食べ終えてお弁当箱をたたんでいた恵子に、徐に尋ねた。

「えっ、ええ！？あるわけじゃない、彼氏もいないんだから！」

「そ、そうだよ、ゴメン。」

「なにになに？もしかして恩田先輩と、とうとう初ちゅーしちゃったとか！？」

「し、してない！してない、んだけど・・・」

どういえばいいかわからず、苦笑いを返す。

すると、さらに悪戯な笑みを浮かべた恵子が顔を覗き込むようにして

「されそうになったんだ？」

なんて言うから一気に顔がボツと熱くなるのが自分でもわかった。

図星なわけで。

「うん・・・」

と答えるしかない。

答えて、言葉が続かなくて黙り込んでしまった。

その沈黙に恵子がつき合ってくれて、それがちよつと嬉しくて、私はようやく話してみようと思えて口を開いた。

「あのね・・・キス、されそうになったんだけど、避けちゃったの。彼も、初めてだからしょうがないって言ってくれたんだけど、その後もそういう雰囲気になると、わざと誤魔化したりして・・・できないの。どうしよう、こんなんじゃ青子、嫌われちゃうよね。」

「そんなの、心の準備ができて、したいなっと思って思ったらすればいいんだよ！嫌々なんて、やりたくないよ絶対！」

「そう、だよな？」

でも、変だなって自分でも思っていた。

好きな人となら、したくなるものだって、思っていたから。

間もなく、新しい季節がやってきた。

外では散り始めた桜の花びらが舞っている。

新しい3年の教室。

同じ理系だったのに、快斗とはクラスが離れた。

残念・・・という気持ちが湧いてきて、それを慌てて心の奥に追いやった。

恩田さんは大学生になった。

時々、時間が合うと学校まで迎えに来てくれるのは以前と変わらな
いけど、制服じゃなくて私服になった。

お陰で目立ってしょうがない。

内心、それは嫌だった。

だって――

快斗に見られたくない――

複雑な想い。

本当はわかっている。

快斗のこと、快斗への想い、捨て切れてなどいない。

だから、恩田さんとのキスも、できないんだ。

でも、そんなんじゃダメ。

恩田さんはいつも私に優しく手を差し伸べてくれる。

好きだと言って、笑いかけてくれる。

恋愛に臆病になってる私のペースに、合わせてくれている。

その気持ちに応えたい。

それは嘘じゃない。

一緒にいたい気持ちも、本当。

そう、思っていた。

そして、今日。

梅雨の合間に現れた青空が心地良い放課後。

校門で私が出てくるのを待っててくれた恩田さんと、電車に乗り込み彼の家へと向かった。

彼の使っていた参考書などを見せてもらうため。

結局、進級してから私と彼の距離は縮まることもなく、そのうちにキスをねだられることもなくなって、ちよつとホツとしていた。

こうして家にいると、以前なら「キス、したい。」と単刀直入に言われていたのだ。

しかし、今日も適度な距離感を保っていて、それが安心で・・・。
やっぱりそんなの、付き合ってるのに変だと思った。

帰り際、冊子をいくつか入れた袋を玄関先で渡されながら、頭をくしゃくしゃと撫でられる。

「いいの？ 駅まで送るのに」

「大丈夫です、すぐそこだから。」

「そっか。」

その指先が耳をたどり、頬を滑る。

見上げると、彼の瞳が揺れた気がして・・・

どきん、と胸が飛び跳ねた。

ヤバイ、キスされる——！

と、思った瞬間、その指は鼻の頭をちょん、と小突き、彼は可笑しそうに表情を崩した。

「そんな警戒しないでよ。無理にはしないって言ったじゃん。」

「えっ、あの、ごめんなさい・・・」

「謝るなって。じゃ、気をつけてな？」

「はい。お邪魔しました。」

彼の家から駅までの道。

てくてくと歩きながら、考える。

青子となんて付き合って、何が楽しいんだろう。

家に着くと父親はまだ帰ってなかった。

カバンからケータイを取り出してテーブルに置くと、新着メールを知らせるランプが点滅している。

開いてみると、同じ予備校の女の子からだ。

本文を読み進めて、私はそのまま凍り付いたように、動けなくなつた。

心も、体も。

<25>揺れる想い（後書き）

あけましておめでとうございます。
今年もよろしく願います。

前回の更新からだいぶ日にちがあいてしまいました！
もし万に一つ、更新を待つて下さっている方がいたら、お待ち
たせしちゃってすみませんでした。

お話も終盤に入ってきました。

完結に向けて、どんどん書き進めていきたいと思っています。
とはいえ、ちょっと今月は忙しく（遊びにw）昨年のように短期更
新は難しいと思いますが、まあ、お付き合いください。
いつも覗いてくれる方には感謝いたします。

どんよりとした雲に覆われた空が、今にも泣き出しそうな午後。

どこかの家に揺れる七夕飾りが目に入る。

カバンを肩にかけ、もう片方の手はポケットに突っ込み、

“もう7月か・・・”

そんなことを心の中で呟いた学校帰り。

コンビニに寄ろうと思い、いつもはあまり通らない道を歩いていると、小さな公園のベンチにぽつんと座っている青子の姿が目に入った。

一度は通り過ぎて。

ふと、止まる。

回れ右をして、さり気なくもと来た道に戻ってみる。

それから公園を通り過ぎたあたりでまた向きを変えて、ベンチに目をやる。

青子はボケーっとどこかを見たまま、妙に寂しそうな表情をしている。

オレはため息をつく、入口にある自動販売機に小銭をジャラジャラ突っ込み、ボタンを二回押した。

「ほらよ。」

ペットボトルのお茶を差し出したオレを見上げた青子は、目を丸くして、それから僅かに微笑んだ。

「かいと・・・」

やけに嬉しそうに、それを受け取りながら。

その横に少し距離を空けてどかつと腰をかけ、コーヒーのプルタブを引きながら、さり気なく尋ねた。

「なーに物思いにふけてんだよ。」

それでまた青子は黙り込んでしまう。

湿った風の音だけがざわざわと耳元を掠めていく。

コーヒーを喉に流し込み、誰かが忘れていった砂場のバケツが転がるのを目で追いながら、青子の答えを待っていた。

それから風が止むのと、青子が口を開いたのはほぼ同時だった。

「彼氏、浮気してるかも。」

思わず口を含んだコーヒーを嘔き出しそうになり、無理矢理飲み込んだ。

「・・・はあ？」

「はあ？つて、感じだよね・・・」

そう言つて、青子は自分のケータイの画面を開いてオレに差し出した。

それは、誰だか知らないが青子の友達から来たメール。

『伝えるかどうか凄く迷つたんだけど黙っておくほうがよくないと思うからメールしたよ。』

あのね、さっきね、渋谷で恩田先輩が知らない女の人と手を繋いで歩いてたの。

しかも、円山町なんだよね。

人違いだったらいいけど、顔もハッキリ見たし、持ち物も見覚えあったし、まず間違いないと思う。・・・』

その後も怒り狂つたその友達の記事は続いていたが、状況は十分わかつたので返した。

そして一言

「最低だな。」

とだけ口にして、残りの缶コーヒーを胃に流し込んだ。
沸々と沸き上がる憤りと一緒に。

「でも、青子も・・・悪いんだと思う。」

「んなわけねーだろ。」

「だって……。」

突然、首を傾げなくなるような事を言い出した青子は、言いにくそうにしながらも、驚きの事実を口にした。

「キスも……できないんだもん……」

「……」

オレは一瞬、言葉を失った。

キスもできない？

キスもしてないってことか？

沈黙するオレにも構わず、青子は開き直ったように話し始めた。

「それそうな雰囲気になると、はぐらかしちゃうの。」

恥ずかしいとかじゃないんだけど……なんか、できなくて……。だから浮気されても、文句言えないのかも……」

「だからってあり得ねえだろ。」

その男への怒りを言葉尻に露わにしながらも、“キスもしていない”というその事実、じわじわと喜びにも似た感情が湧き上がってくるのを自分で感じていた。

「でも一緒に歩いてるだけで、何もないかもしれないし……」

「いや、あるだろ。」

「そうなの？・・・やっぱ、快斗も、その・・・キスとかさせてもらえなかったら浮気する？」

突然の青子の質問に、一瞬気が遠くなりかけた。

「は！？な、何言ってるんだよ！？」

「だって、男の子の気持ちなんかわからないし・・・」

「さあな。したことねーからわっかんね。」

「・・・えつ。浮気を？・・・それとも・・・」

「どっちも。」

言い捨てて立ち上がり、照れを隠すように空き缶を脇のゴミ箱に放り投げた。

「帰るぞ。」

「・・・うん。」

久しぶりの感覚。

当たり前のように、後ろから青子がついてくる。

こんな風に二人で話すのも、何ヶ月ぶりか。

“そんな男やめてオレにしとけ”

とか、どこかで聞いたようなセリフが頭を掠めて消える。

そんな事、言えるほどオレが出来た人間なわけでもない。

それに・・・

結局、無言のまま青子の家の前に着いた。

「ありがと。快斗と話できて嬉しかった。また、なんかあったら聞いてくれる？」

青子は少し俯きながら、遠慮がちにそう口にした。

それが妙にオレの胸をざわつかせ、真っ直ぐ見れずに頭をポリポリ掻きながら

「ああ。てか、彼氏とちゃんと話しろよ。」

と返すのが精一杯だった。

「うん。そうする！じゃあね。」

玄關の向こうへと姿を消した青子。

思えば、あいつの顔をまともに見たのも久し振りだった。

変わってたらと思うと、怖かった。

他の男に変えられてたらと思うと、嫌で嫌でたまらなかった。

でも、何も変わっていなかった。

あの夏の日と、

何ひとつ変わっていなかった。

しかし。

オレは卒業と同時に、アメリカに行く事が決まっている。

走り出しそうになる想いに、きゅっとブレーキを掛けた。

<27> 十字路の先

誰とも約束のない週末。

キッドをやめてからというもの、そういう日の昼間に家に籠もるのがあまり好きではなかった。

理由もなく家を出て、なんとなく電車に乗る。

今ならちょうどセールの時期で、買い物するのも悪くはない。

たどり着いたのは空宿駅。

駅前の大通りから一本内側に入り、よく行く店を覗いていく。気に入ったＴシャツを数枚、買い込んだ。

地元と違い、知り合いに会うことが無いので落ち着いて品定めができる……

はず、だったのに。

何の運命の悪戯なのか。

店を出て歩き始めた瞬間、飛び抜けて視力の高いその眼が、路地の先にいる二人を捉えた。

青子とその彼氏。

あの公園で話をした後、どうなったかは聞いていなかったが、どうやら普通に過ごしているらしい。

二人は数十メートル先にある店の店頭で、並べられた雑貨を手にとっ
て見ている。

ここでオレに与えられた選択肢はふたつ。

ひとつは、このまま路地を外れて立ち去る。

もうひとつは・・・思い切って声をかける・・・

後者を選ぶことの無意味さなどわかっている。

しかし、オレと青子はいくまでも幼なじみなわけだし、そうであればこんなところで偶然会ったのに声を掛けないのも逆に不自然だし・
・

などと考えている間に、二人は店から離れて歩き始めたので、それ
を追うように自分も歩みを進めた。

“ っーかこれじゃあ尾行じゃねえか・・・ ”

距離は縮まっていつてるものの、声を掛けるタイミングが掴めずに、

後をつけているだけの状態。

そうになると、いつそのまましばらく尾行してみるのもいいかもなどと、悪趣味な考えまで沸き上がってくる。

いやいやいや、と頭を横に数回振ってそんな考えを振り払おうとしたとき、男の誘導で二人が十字路を左へと曲がっていった。

あっちになんかあったっけか？

てくてくとその十字路へ向かい、左へと曲がる。

細い路地には住宅や古いビルが並んでいるだけで、誰もいない。そして目に入ったのが、少し先に数件立ち並ぶラブホテル・・・

「あいつらどこに・・・！？」

焦りを隠せない。

足早に進んでいたところ、声が耳に入ってきた。

「やつ・・・やだよっ・・・」

「なんでだよ！？オレたち付き合ってたのに！」

——！！！！

オレは頭の中で警笛が鳴ったかのように駆け出した。

声のした辺りで足を止めると・・・

建物の隙間に、青子の手を壁に押さえつけて無理やり顔を近付けようとするとその男と、必死に抵抗する青子がいた。

「てめえ何してんだよっ！！！」

もう、無意識だった・・・

二人に向かって駆け出しながらそう叫んでいた。

青子は目を丸くしてオレの登場に驚いていて、男は眉間に皺を寄せてこちらに振り返る。

距離が詰まったその瞬間、オレは男のシャツの襟元を左手で掴んで青子から引き離し、反対側の建物の壁に押し付けた。

怒りに任せて右手を振り上げたその瞬間

「ダメっ！！！！快斗やめて！！！」

と、青子の叫ぶ声が響いて、ハッと我に返った。

空中で止まった拳。

それを静かに下ろすと、掴んでいた胸ぐらを突き放すようにして男から離れる。

「な、なんなんだよテメーは！」

男が当たり前ともいえる質問を、胸元の皺を払いながら投げかけてきた。

しかし、それに答える気など無い。
男に背を向け、青子に声を掛ける。

「青子、帰んぞ。」

「えっ？」

明らかに戸惑いの表情を浮かべて、男とオレを交互に見ている青子。それに苛立ちを隠せず、もう一步詰め寄った。

「オメーなあ！このままじゃ何されっかわかんねーぞ！？ボーっとしてんじゃねーよ、アホ！」

そう吐き捨て、ぱしっと青子の手を取ると、男を無視して立ち去ろうと試みた。

「おいコラ！テメー！マジでなんなんだよ！？なんか勘違いしてんじゃねーの？俺ら付き合ってたんだけど？彼女に何しようよとテメーに関係ねーだろ？」

しかし、なおもつるさくそんなふうに突っかかり、オレの肩をグイッと引き戻してきた。

振り返り、その焦りに満ちた姿と対峙する。

湧き上がる怒りを瞳の奥に隠し、冷やかな視線を男に投げつけた。

「知ってますよ？でもコイツ嫌がってんじゃないすか。」

「オメー、もしかして・・・」

どうやら、青子はこの男にオレのことを何かしら話していたらしい。

青子は泣きそうな顔で地面をみつめている。

なんでそんな顔、してんだよ？

オレが止めに入っただのは間違ってたのか？

同時進行で他の女に手を出すような奴と、付き合ってたれんのかよ？

「どーすんだ、青子。自分で選べよ。」

そいつとこのまま、ここに残って付き合い続けるのか。

ここから立ち去って、別れを選ぶのか。

どーすんだ、などと聞いておきながら、オレは確信していた。

「快斗と帰る。」

そう、言うことを。

「マジで言ってるの！？へえ・・・青子ちゃん奥手なふりして、意外に二股とかできちゃったり・・・」

「それは恩田さんですよね!？」

急に強い口調でそんなセリフが青子から飛び出した。

恩田とかいう男は、信じられないとでもいう風に、青子の顔を見据えた。

オレは知っている。

実は人一倍、気が強くて、正義感に溢れている。

人一倍、人情に厚く義理堅くて、それが裏目にでることもあるが、おかげで誰からも好かれる。

裏表のない、素直さ。

子供みたいな普段の仕草に隠された、大人の顔。

「なんだよ？オレがなんで・・・」

「・・・なんでは、自分が一番わかってるんじゃないですか？今日は、その事を話そうと思ってたけど、もう、いいです。帰る。さよなら。」

途中までは大人な物言いなのに、最後は投げやりになるあたり、青子らしいな・・・と苦笑いしかけたところで、急にがしっと手首を掴まれた。

「おわっ」

「行こう、快斗。帰ろう。」

青子にぐいぐいと引っ張られていく。

もう奴は追って来なかった。

十字路を曲がるとオレの手を離し、早歩きでずんずん歩いていく青子。

それを追う、オレ。

といっても、青子の早歩きなどすぐに追いつけるのだが、黙って後ろに続いた。

——泣いているのが、わかっていたから。

青子なりに、真剣だったことを知っている。

オレたちは、ただ黙って当てもなく歩いた。

<27> 十字路の先（後書き）

更新の間隔が・・・やはり空いてしまいました。

ともかく最後まで書き終えることが目標！！

です。。。では！

<28>告白

青子を家に送り届けるまで、オレらは無言だった。

でもそれは決して不自然な感じではなく、その時はそうするのが一番に思えたから。

翌日の夜、青子からメールが届いた。

ちゃんと話してきた

あのままで終わりにできるほど、いい加減な気持ちで付き合ってたわけじゃないのは、わかっていた。

また泣いてんだろ？

わざと意地悪な返信をすると、すぐにケータイが光る。

泣いてるよだから慰めにきてよ！

その返事に思わずぷつと吹き出すと、メールの画面を閉じて立ち上がり、ケータイをジーンズのポケットにねじこんだ。

「泣いてねーじゃん。」

玄関先に出てきた青子に、からかうような口調で言葉を投げかける。するとたちまち口を尖らせる彼女の表情は、思ったより落ち着いていた。

「親父は？」

「徹夜だつて。」

軽く言葉を交わしながら、リビングのドアを開ける。

そつえば、ここに来るのも久々だった。

ダイニングの椅子に腰をかけると、麦茶の入ったグラスが置かれた。

青子は向かいに座り、膝を抱えて俯く。

オレは目の前にあったリモコンをテレビのほうに向け、電源ボタン

を押す。

急に笑い声が部屋に響きだした。

テーブルに頬杖をつき、ボーっと画面に視線を送りながらも、そんなものは見ているようで見ていない。

意識はすぐそこにいる青子に向いていた。

沈黙を先に破ったのは青子。

「ねえ、快斗。」

震えるような、小さな声で。

「ん？」

視線をテレビに向けたまま、そっけなく返事をする。

すると青子は突然こちらに身を乗り出し、オレの腕を掴んだ。

「快斗、聞いて？」

目の前には、青子の真剣な眼差し。

オレを突き刺すように見つめる瞳。

何かを訴えかけようとする強い意志を感じ取り、オレは思わず息を呑んだ。

ほんの少しの間を置いて

「快斗が好きなの。」

唇を割って零れたその言葉。

それと同時に、目の前の瞳から溢れ出した光の粒。

たった今起きた出来事が瞬時に理解できず、オレは金縛りに合ったように動けずにいた。

男と別れたばかりで・・・

いや、それ以前に、オレになどとくに愛想つかしたんじゃないのか？

どうなってたんだよ？

頭の中に疑問が浮かび上がるが、どれも言葉にならない。

ただひたすらに、オレからの言葉を待っているのに。

それでも答えられずにいると、やがて腕を掴んでいた手の力が緩んだ。

見つめ合うその眼差しに、虚ろな色が差し始める。

“ ちょっと待てよ・・・どーすりゃいいんだよ・・・ ”

湧き上がる焦り。

オレだって。

好きだ。

でもそれを言ったところで、
あと1年も経たないうちに別れはやってくる。

日本に帰って来ることなど、年に一回あるかないかだろう。

そのつもりで、全てを賭けて渡米する。

そんな中で想いを確かめ合ったところで
余計に辛くなるだけだ・・・

オレの勝手な都合でこれ以上、青子を振り回すわけにはいかない。

これがもし、オレがもう社会人として一人前だったら一緒について
こいと言えるのかもしれない。

しかし、オレは何だかんだデカいこと言っても結局は高校生のガキだ。

渡米の費用だって親から出してもらうことになっている。

もちろん稼げるようになったら倍以上にして返すつもりでいるが、結局今は一人で生きていくことなど到底できない未熟者だ。

青子だって大学受験するつもりだろう。

父親のいる日本で進学し、就職し、結婚して子育てするような普通の暮らしを、オレは叶えてやるができない。

オレは……

青子を幸せにしてやれない……

「青子……オレ、応えてやれねー……」

決して瞳を逸らすことなく、そう、返した。

それが、一番お互いのためになる答えだと、その時は信じて疑わなかった。

&1t・28>・告白(後書き)

お久しぶりです！

なのに短くてごめんなさいっ。

でもちょっとづつ終わりに向けて書いてますので、
宜しく願います(^3^)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3503o/>

最後ノキセキ <快斗×青子>

2011年3月5日00時20分発行